幼児の教育　第100巻　第4号　平成13年4月1日（毎月1回1日発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289－0836

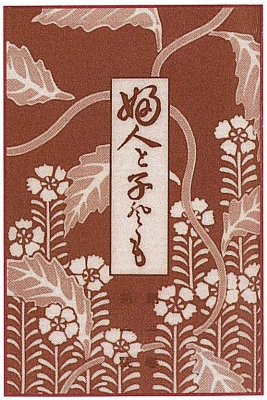
創刊100周年

幼児の教育

家庭－保育所－幼稚園

2001

4



第一巻第一号（明治34年創刊号）表紙

第100巻 第4号 日本幼稚園協会

お待たせしました!!
文部省の指導要録作成協力者会議のメンバーによる解説書の決定版です!

幼稚園幼児指導要録・解説と記入の実際

最新刊

平成12年3月に改訂された「幼稚園幼児指導要録」の解説と具体的な記入の仕方を1冊の本にまとめました。ていねいで分かりやすい解説、今回から導入された満3歳入園の子どもから5歳児までの豊富な記入例を掲載しました。「要録」記入でお悩みの方に最適の本です。

〈内容構成〉

第1章　指導要録の意義
第2章　指導要録の解説と記入の実際
第3章　指導要録の取扱い
第4章　指導に関する記録の記入例

A5判・248頁

定価：本体1,500円＋税

柴崎正行（東京家政大学教授）編

執筆　安部真知子
（香川県高松市立檀紙幼稚園長）

岡上直子
（東京都教育庁指導部主任指導主事）

片岡真弓
（東京家政大学附属みどりヶ丘幼稚園教諭）

柴崎正行

田中雅道
（京都市・光明幼稚園長）

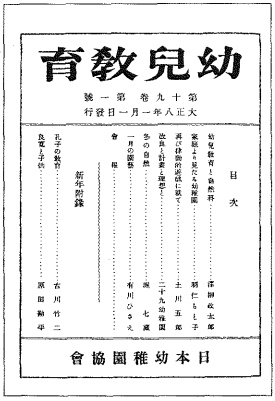
松村和子
（東京都・鶯谷さくら幼稚園副園長）

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第100巻　第4号



幼兒教育

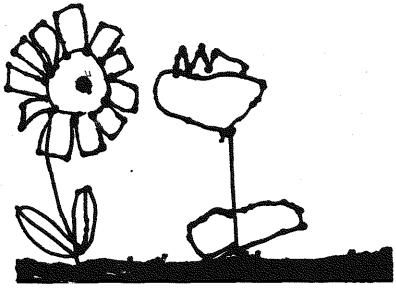
第十九卷　第一號

大正八年一月一日發行

目次

幼兒教育と自然科……澤田政太郎
家庭より見たる幼稚園……朝仁もと子
再び科學的基礎に就て……土川五郎
故良人計畫と理想と……二十九幼稚園
多の自然……浜七藏
一月の園藝……有川ひさえ
會報……
新年附錄
孔子の教育……古川竹二
良寛と子供……原田和平

日本幼稚園協會



幼児の教育　目次

――第一〇〇巻　第四号――

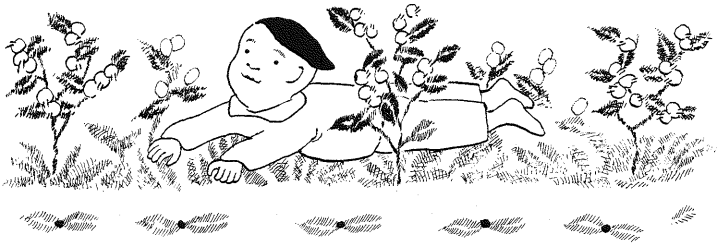
© 2001
日本幼稚園協会

特集〈『幼児の教育』を振り返る〉

創刊一〇〇巻記念座談会……津守　真・本田　和子・田代　和美…（4）

「『幼児の教育』史」点景
――一〇〇巻の重み・改題の意図・幻の昭和二〇年一月号――…河合　隆一…（26）

『幼児の教育』と私
素人編集者の思い出……赤間　峰子…（32）

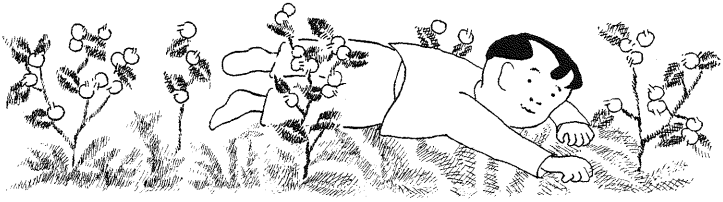


〈再録〉

婦人と子ども（幼児の教育の前身）創刊当時のこどもと
其頃の幼稚園の状況に就いて（第五十巻第十一号）……東　基吉…（36）
発刊の辞（第一巻第一号巻頭）……（52）
椿の唱歌（第一巻第一号一頁）……（53）

『幼児の教育』と私
「目時」の頃……皆川美恵子…（54）
私と『幼児の教育』……池戸　允子…（58）
『幼児の教育』と私……桝田　正子…（61）

表紙絵／片柳　淳子
扉題字／津守　真
扉カット／第十九巻第一号表紙・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ「花の野原」
編集委員／田代　和美・高橋　陽子・桝田　正子
編集部／仲　明子



創刊一〇〇巻記念座談会

津守　真
本田　和子
田代　和美

当時の編集会議は――

田代　いよいよ『幼児の教育』が一〇〇巻という節目を迎えました。二年ぐらい前から一〇〇巻になったらただぶん何かすごいことをしなくてはいけないんだろうなということを思いつつも、結局バタバタと毎月毎月作ることに追われ、気がついたらもう一〇〇巻が来ていました。何か派手なことをするのもこの雑誌としては何となくそぐわないし、少しずつ何かしらを一〇〇巻の節目に入れたいと思い、先代・先々代の発行人の先生方に力をお借りすることにしました。今までのこと、そしてこれからこの小さい雑誌が二十一世紀に一体どういうことがで

きるのかなどを考えていくため、お話を伺いたいと思います。今日はお呼び立てして申し訳ありませんが、宜しくお願いいたします。先生方が主幹をなさったのは何年間くらいですか。

津守　ちょうど三〇年ぐらいですね。

本田　私が一〇年ぐらいですか、津守先生の後だけですから。

田代　そうすると一〇〇巻のうちの、もう後半の四〇年。私ももう六年やりましたので、約半分は三人で。

津守　三人で約五〇年でしょ。

本田　そうですか。じゃあ、倉橋先生が半分近くですか？　四〇年以上……。

田代　一時、いろいろな方が主幹になっていらっしゃる時がありましたね。その間はわからないのですが、でもお二人の先生方で約半分ということで、その当時のお話や印象に残っていることや苦労したことなどからまず色々とお話を伺おうかなと思っています。津守先生よろしいですか。

本田　津守先生は、お若い時からやってらっしゃいましたよね。

津守　そうですね。何しろ雑誌は毎月、毎月出さなくてはならないから、それに追われますね。思い出すというとまずそれが第一。それからこの間、ちょうど一〇〇巻一号に、倉橋先生から受け継いだ時のこと、東基吉さんのこと、それともう一つ足して、現代のトピックの教育基本法の改正に関わるこの雑誌のことを書かせていただいたんです。本当に一〇〇巻を迎えるなんてね。一〇〇巻のことで座談会やるなんて、そんな日があるということを、僕は実感として考えたことがなかったです。そんな日が来るなんてことを。よくまあ、続いたと思いますね。

本田　そうですね。

津守　それは、こうやって、代々こりゃ大変だと思って続けてくださってる方がおられるのはありがた

いことだし、ご苦労なことです。それからそれを助ける編集の方々、一体もう何人の方が編集の実務をされたか。十人は超えるでしょうね。そういう方が献身的に、という言葉があたるくらいなされたことと、さらにフレーベル館が、かなり損得を度外視して続けてくださったこと。これは倉橋先生の頃からの、フレーベル館とのつながりなんですよね。それで人によっては、フレーベル館とこの雑誌の編集との間に、何か癒着があるんじゃないかということを何回か直接間接に聞かれたこともありました。そんなことはもちろん一切なくって、全く無報酬で我々が編集して、そして編集実務の費用は通常の編集費には満たない程度の額で、みんなで寄ってたかって作ってきました。フレーベル館の力は、大きいと思っています。

本田　一時、編集者が入ってらした時期がございますね。畑さんという方が。

田代　フレーベル館の編集の方が？

本田　ええ。入って手伝って、ちょっと短い期間でしたけど。結局こちらに任せたほうがいいということになってお引きになったんでしょうか。

津守　とても、我々だけじゃできないから、専門の人を入れてくれって言ったんです。ほんのわずかな期間でした。それが専任で編集を手伝ってくれる人を入れたそもそもの最初でしょうか。

本田　そしてその後、池戸允子さんとか、木原溥子さんとか、院生の方などがお手伝いすることになったんですね。その後、井上直子さん、それから、赤間峰子さん。

津守　水田順子さんも三年くらいなされたでしょう。

本田　そして皆川美恵子さんがかなりお手伝いして。

津守　まだ抜けてる人があるかもしれないけど……。

本田　この方たちが編集のお手伝いをしていた。じゃあ、畑さんの前は、倉橋先生は、附属幼稚園の先生とやってらしたんですね。

津守　そうです。菊池ふじの先生が主にやっておられました。その前は、新庄よし子先生もかなりやっておら

れた時期がありましたが、でも菊池先生が主だったみたいですね。僕が編集をやるようになって、菊池先生は、手持ち無沙汰になられたような感じがありました。

田代　編集会議というのはどういう形でなされていたんですか。

本田　最初は幼稚園でやってらしたんでしょうか。

津守　最初はね、キンダーブックの大塚さんという編集者の方などが編集会議にでていました。それが及川先生はちょっと気に入らなかった。この雑誌は倉橋先生の個人のものじゃない、これは大学のものだと主張されてね。これはもうほとんど、先生の晩年ですけど。それで、最初の会に、私も出るようにと言われて、僕は倉橋先生と親しかったから、倉橋先生もとても喜んでね、まあそういうことです。

本田　そうですか。では津守先生はアメリカから帰国してすぐから編集には参画なさったんですね。

津守　それが昭和二八年一一月。倉橋先生の自宅で、もう倉橋先生は寝たり起きたりという感じでした。

田代　津守先生の代になられてからの編集会議の持ち方は、やっぱり変わっていったのでしょうか？

津守　倉橋先生がご存命中は、倉橋先生のお宅に伺ってやりました。亡くなったあとか、亡くなるもうちょっと前くらいからは……。昭和三〇年に亡くなったのでその号を出すためには、昭和二九年ですよね。その頃から及川先生の園長室に僕が出かけていって、毎月やった時期があります。

本田　編集主幹が及川ふみ。編集主任津守真という時代ですね。

津守　そうです。

本田　ただし、編集兼発行人はすぐに津守真になります。

津守　うん、倉橋先生から僕の名前に入れ替わったんで。

本田　そのあと附属幼稚園の園長が載るような時期

がございませんでしたか？　坂元彦太郎とか周郷博とか。

津守　ええ、坂元先生が、自分は園長だから津守さんは雑誌の編集をせよと言われて。

本田　あの方々はどういうご身分で載ったんでしょうか？

津守　それは、園長。

本田　園長で、編集委員？

田代　編集協力委員として、波多野完治先生たちが載っている時期もありますね。

本田　それはちょっと前ですか。

津守　ちょっと違います。それはヌースからの続きです。倉橋先生が戦争直後にヌースという欄を作られ（ギリシャ語で「ヌース」は「理性」という意味です）、それを書く協力委員というのを六人作られた。牛島義友、及川ふみ、斎藤文雄、それから多田鉄雄、波多野完治、山下俊郎。

本田　わりと巻頭言をよく書いてらした方たちですよね。あの頃は結局、附属幼稚園長と津守先生が主でいらして、私がちょこちょこ口をはさんでという形になっておりましたよね。

津守　本田先生は、何年にお茶大に来られたのでしたか？

本田　昭和四五年くらいじゃないでしょうか。一九七〇年。

津守　昭和四五年ですか。昭和三〇年に倉橋先生が亡くなってから、僕がこれを引き継いだのが昭和二八年の一一月からだから、一五年以上あったんですね。

＊

本田　あの頃、中教審でしたかしら？　先導的試行案というのを出して騒いだ時期がございましたね。そして、中教審の委員だった方たちをお呼びして、座談会か何かしたことがあって、私たちの考え方は保育にしても保育研究にしても、古いんじゃないかって批判されたこ

とがありましたでしょう。えーっと、誰か中教審で活躍してらした心理学の方をお呼びしたんですよね。その時に、現場を尊重して現場から理論を作り上げるみたいな考え方は結局、言葉の意味の理想であって、そんなことしていたら現場は少しも進歩しないというようなことを、わりとはっきり言われたことがあるんです。そしたら、そこに来ていた他のメンバーの方たちが一斉に反発してね。清水エミ子さんとか、清水光子さんとかね。保育に古いとか新しいということはない、と一斉に反発されたのを覚えてるんですよ。私、なるほどこういう思想はこのお仲間には浸透してるんだなと思ったことがありました。

津守　そこは現場の保育の強さですね。誰もそんなこと言わなくったって、保育の実践では、「真は新だ」という誰もが自ずからに考えるものがあるから。そのおかげでその上に乗っかって保育の答えが出るんじゃないかしら。

本田　あと、倉橋先生からのメモというので、七項目くらい何か書いたものが見つかったりしたのがありましたね。

田代　津守先生が前に書かれてたのがありましたね。

津守　この間、一〇〇巻第一号に書きましたけれど。

田代　これは、取っておかれたらいいですね。これは先生がお書き写しになったんですか？

津守　僕が出席した最初の編集会議のときにメモをして、家に帰ってからオニオンペーパーに書き直したものです。（一〇頁写真、一一頁かこみ参照）

本田　これは写真かなんかに写して載せたい感じですね。「『幼児の教育』は保母を対象としており、保育の根本を理解させ、その精神を鍛えることを従来からの方針として……」

津守　それは清書したんです。僕ね、とってもこういうメモ取るのは、へたなんですよ。これは、一番最初のときのですね。

昭和三〇年以降の保育の変化

田代　先生方の研究室に残されていた『幼児教育』とか、『保育の手帳』、それから、『保育』、『月刊保育』など……。あれは何年分くらいだったか、かなりたくさん昔の雑誌がありましたが。

津守　そう、ひかりのくにとそれから……。

本田　チャイルド社。ひかりのくには大阪ですね。

津守　城谷さんが編集していたのが、今の『月刊カリキュラム』だと思います。

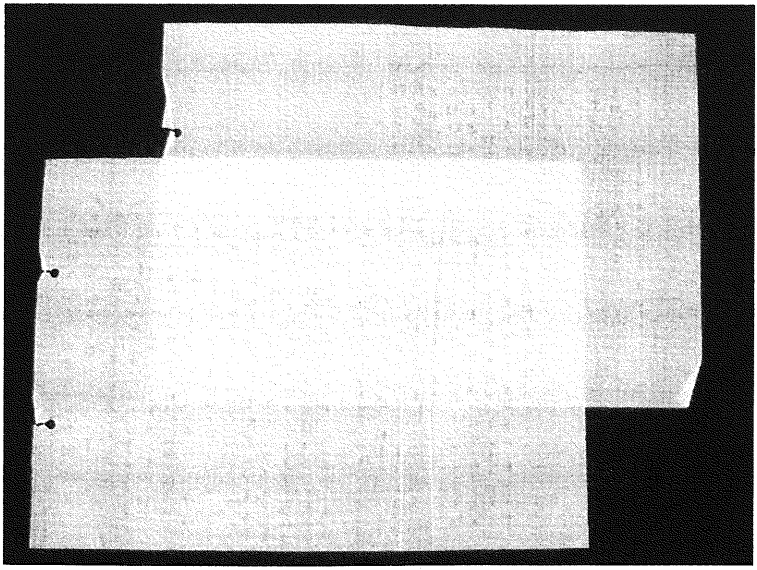
田代　『保育』と別ですね。

本田　『保育』と『月刊カリキュラム』がひかりのくにから出てて、それからチャイルド社から『保育ノート』っていうのが出てたかな？

田代　はい。

津守　ああいうのはね、昭和三〇年代ですよ、だいたい。

本田　そうですね、戦後パーッと出た雑誌ですね。そ



◀「幼児の教育」編集方針について（津守氏のメモ）

「幼児の教育」編集方針について

十一月五日　倉橋邸にて倉橋、及川、津守が集り及川、津守は、倉橋と協力して「幼児の教育」の編集をする事を、非公式に談合し、以下の如き結論を見た。但しこれは、原案であって、今後更に検討を要するものである。

一、「幼児の教育」は、保姆を対象としており、保育の根本を理解させ、その精神を伝える事を従来からの方針としてゐる。従って他の同類の雑誌の如く保育の技術的面のみには大きな力を注がず、独自な立場をとってゆく。

二、日本幼稚園史の資料の意味で、廿九年度を通して、各地方の幼稚園の今昔をとり上げる。従来入れて来た保育界の今昔は、名古屋、愛知県、岡山県、京都市、長崎の各地であり、九州大分、兵庫県、福島県、静岡県、廣島県、山梨県、長野の各地が依頼出来ると思われる。

三、幼稚園の先生としての根本問題で、遠く保育に関係があって保姆にふわりとした感じを與える記事を入れる。この場合、心理学者ではなく、社会の各方面の人を取り入れる。例、柴田みなを、澤柳大五郎。

四、文学的讀物を入れる事、例えば、松原至大氏、但し、顔ぶれを適当にする事が必要である。

五、母親が分る程度の講座を入れる事、例、稲垣氏、栄養、矢部氏、被服論等。

六、ヌースは協力委員が交互に執筆する。

七、倉橋先生の保育考を出来るだけ多くとり入れ、幼児觀を徹底させる。

八、日本保育界の発展及び、保育研究の促進のため、実際家、幼稚園専門家、心理学者、教育学者の協力の下に、保育界の問題及び、保育理論の研究の項目を入れる。実際家の声を反映させ、研究者との協力の下に、解決を求める。また、保育に関する発表機関とする。特に、お茶の水幼稚園及び児童科研究室の協力研究を定期的に発表したい。これについては、今後特に熟考検討を要する。

九、寄稿は検討の上、出来るだけとり上げる。

十、歸朝者即ち、戸倉、斉藤、森脇先生に早く依頼すること。

の中では、ひかりのくにのが一番古いんです。戦後出た雑誌では確かあれが一番老舗なんですね。ただそれ以前の大老舗がフレーベル館だからなんてよくむこうの人は言ってましたけどね。

田代　そういう雑誌に対して何か意識があったんですか。

津守　それはね、僕はありましたね。あったという感覚。雨後の筍のようにいろんなものが出たのが、昭和三〇年から三五年なんですよ。それで、その編集委員になってくれとか、書いてくれとか言われたけど、僕みんな断っちゃった。そういうのは『幼児の教育』と違って、みんな、その月の材料をどうするかっていうような話が主でしょう。だから『幼児の教育』はそうじゃない、もっと基本をやり続けるという倉橋先生からの、そういうのがあるからね。比較したら面白いだろうと思いますよ。向こうの雑誌の方が、その時々の、時事問題が、出てきますよ。こっちはいつでも同じこと言っててね。

本田　ただ、木原さんが言ってらしたんだけど、向こうはハウツーでね、明日何を教材に使うかというのが出てくるから若い人が飛びつく。それと同じことをやる必要はないけど、『幼児の教育』だって、昔を紐解けば、ちゃんと教材が大切だっていうことを、「発刊の辞」にうたってますでしょ、『婦人と子ども』に。だからもうちょっと洗練された、教材の定義の仕方はないかと彼女は考えてて、「ねえ本田さん、何かいい知恵ない？」なんていってらした時期があったんですね。だから、教材っていうかハウツー一辺倒でいくのとは違う形で、現場的なもの、マニュアルでもない、教材でもない、何かないかなって、模索されていたということでしょうね。

津守　それは倉橋先生も非常にしっかりね。話がちょっと、また歴史のほうに戻るけれども、東基吉の次が倉橋惣三でしょ。僕が『幼児の教育』を創刊号からもう夢中になって読んで、読破してた時期があるんです。あれをずっと見ますと、倉橋先生のあの四〇年間は『幼

児の教育』の黄金時代ですね。その時代のものは、必ず手技があり、お話があり、唱歌があるでしょ。そしてそれの中心が誘導保育のテーマでしょ。誘導保育のテーマのところで最初にボンと出てきたのが、及川先生の「八百屋遊び」、それから菊池先生の「人形の家」。徳久さんの「自動車」。新庄さんの「旅へ」。あの辺で誘導保育が形を成してくるところというのが、非常に面白い。それがこの雑誌の、東基吉を第一のピークとすれば、第二のピークですね。誘導保育というのを僕が面白い面白いと思ってそれを何とかしてもっとやりたいと思った時期があって、昭和二九年頃だったと思うんですけど及川先生が、北海道のトラピストで作った動物のぬいぐるみをごっそりともらってきた。それを使ってね、誘導保育をやりたいのでその研究をしてくれないかと言われて、堀合先生のクラスで僕がその記録を取り、「動物遊び」というのでやったんですよ。そして、それから続いて堀合さんがまた幾つか誘導保育を一生懸命やってて、僕も本当にあれは何をやってたのかっていうことにうんと興味があってね、もうくっついて回ってそれを研究しました。一生懸命見た。誘導保育と言っても、テーマがあっても、毎日の保育が主なんです。その中にほんのちょっとずつ、動物遊びとかおもちゃ屋さんとかを、散りばめていくわけです。毎日の生活のほうが、主なんです。子どもが朝来て、そして遊んで、ぶらぶらして、その途中でリレーをやったり、かくれんぼをやったり、砂遊びをやったり……。今と同じですよね。そういうのをやっている中に「ちょっとちょっとあなたもう終わったの？」とか「ちょっと作ってやってみたら？」なんて言って、そういう形で三々五々、子どもがそうやってはまた元に戻っていくということがだいたい一学期じゅう続くんですよ。それを見ていて、誘導保育っていうのは、ただテーマをつけるだけじゃないっていうことが、よくわかってね。そして、見直してみると、及川先生のも菊池先生のも新庄さんのもね、

みんな同じなんですよ。だからこの誘導保育のテーマっていうのは、あの時期に黄金時代を迎えて、その後にずっと尾を引いて、これがこの雑誌の一つのテーマだったんじゃないかしら。

本田　そうでしょうね。一九三〇年から一九六〇年くらいまでは非常に誘導保育の時期ですよね。その後、一九七〇年くらいであれが少し、ぼやけていくというか、テーマが消えていく時期なんです。それで、私なんかはその時期にちょっと立ち会ってるところがあって、堀合先生が「もうこれ無理だわ、引っ張ってる」という自覚をなさった時期があるんですね。あるとき、空き箱に色を塗ってレンガをお作りになって、レンガのおうちを作り始めました。ご自分がせっせとして、子どもが寄ってきて参加し、始めるのがきっかけになるんですよね。それで、何かせっせとやってらして、ああ、レンガのおうちをお作りになるんだなと思って拝見してたら、ある時点で堀合先生がそれをおやめになったんです。

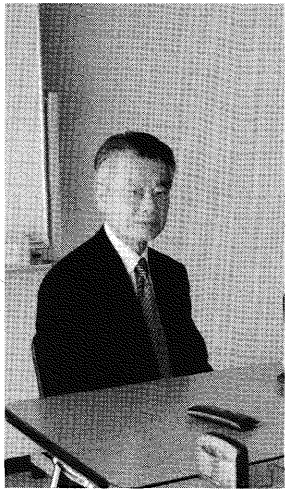
津守　それいつ頃ですか？

本田　和子氏

本田　私がお茶大に来て間もなくですから、七〇何年かの頃ですね。毎週欠かさず附属幼稚園に行ってた頃で。それで私は、どうして途中でおやめになるんですか、あれもう完成なんですかって聞いたら、「変だと思わない？　あの人たちは、先生が何かやってるから、かわいそうだから少し手伝おうかっていう形で、手伝ってる。前の子どもは、何かちょっとしたきっかけで自分からそういうことをやろうってなって、ムンムンと湧いてくるものがあったけど、何かこの頃の子どもってそうじゃないのよね」っておっしゃって、「とすれば、私がこ

うやってやることが無理に子どもを引っ張ることなのかなと思って。ちょっとこういうのはやめて、子どもがすることにむしろこっちが入っていく。だから私の頭の中からテーマとかそういうのを全部捨ててやってみようかと思うのよ」というようなことを言っていらした。たぶんそれがその頃なんです。ただし公立幼稚園では、逆に一生懸命やったでしょ。いろんなところに伺うと、公立では、テーマを作って一生懸命華やかに大きな何かをね。

田代　大きな、大がかりなものを作って。



津守　真氏

本田　それで私が「堀合先生がおやめになろうとしてる時期に公立で盛んになってるのはどういうことかしら」って言ったら、「子どもが変わっちゃった。ある種のお膳立てをすることによって、子どもの自発活動がぐーっと盛り上がってくるような時代が、終わっちゃったんじゃないかとちょっと寂しい思いを持ってるんだけど、他の公立の先生はそういう感想おありにならないのかしら、子どもの見方の違いかしら」とか、そんなことを言ってらした時期があったんです。今はもう、いわゆるテーマ的なものは、個々の活動への援助っていう形になってますよね。

津守　その頃の記録を丹念に取ったのが磯部景子さんなんですよ。その、テーマがどこまでか、そして日常の保育が、どうなのかって、そこを磯部さんは本当に丁寧に記録を取ってた。桝田正子さんも手伝ったんじゃないかな。

本田　そうですね。磯部さんと、私は入れ替わりなんです。磯部さんがお茶大をおやめになって、私が入って

きますでしょ。だからちょうど、磯部さんがやってらしたことのあとを私が見始めたという感じ。附属幼稚園を丁寧に見始めたのは、その頃でしたね。

津守　そしてその黄金時代の誘導保育が、何であれだけできたかと言うと、それは先生が夢中になってそれを夜も昼もそのことばっかり考えてやってる、その情熱なんですよ。徳久さんのも、新庄さんのもね。「旅へ」の時も、夏休みにあの人たち東京駅に行って、駅長さんに頼んで改札係の中まで見せてもらって、そのパンフレットもらってきてためて、子どもが来るのを待ちかねててパンフレットや広告類や、そこから切符の使い切ったやつを出すんですよ。それでその情熱に子どもが駆られるんでね。それ無しでは、あの誘導保育というのはなかったと思う。戦後昭和三〇年頃、単元保育という名前で公立幼稚園がそれをやるんだけど、その時の単位は一週間で。第一日目―導入、第二日目―なんとか。そして、だいたいもう一週間か一〇日で完結して次のテーマに入る、なんてもう無理なのわかってるんですよ。四谷第三幼稚園で相馬誠子さんが、その単元保育の研究っていうのを三年がかりでやるから、研究講師になってくれないかっていうので行ったのが、私が公立幼稚園の研究会の指導講師をやった始まりだったんです。

本田　そうですか。

津守　それで変だ変だと思って、お茶大の誘導保育とその単元保育とはこういう風な点で非常に根本的な違いがあるっていうことを、相馬さんに言うと、相馬さんわかったのね。そういうことがずっと尾を引いて、今でも公立幼稚園はそういう向きも多少あるのかな。

本田　多少ありますね、単元みたいなものが。でも、それが悪いというんじゃないけど、子どもを急いで引っ張ってらっしゃるような感じが無きにしも非ずですね。

田代　逆に言えば、遊びっていうのが重要視されてるために、自分たちの持っている遊びの形とかイメージがどうしても先行してしまい、すごく素朴なことをやっているのをゆっくり見て楽しめない。なになにごっこと名付けられる形にしたいっていうのを感じますね。

本田　そうですね。ちょうど堀合先生が、誘導保育のテーマを解体し始めた頃が、津守先生が変なことを面白がり始めた時期なんですよ。子どもが石をこするとか子どものやってる小さなことの意味みたいなのが、逆に浮上してくる時期なの。一時間石をこすってる子どもがいたって、すごく喜んでいた時期なんですよ。

津守　そうそう。

本田　観察なさる側の変化っていうのもあるんですよね。附属の保育というのは観察する人とのダイナミズムなんです。だから津守先生が石けずりとか、地面こすりにあれほど熱中なさらなかったら、また変わったかもしれないですけど。あれは何故ですか。ああいうことに熱中なさったのは。

津守　あれ、科学的研究っていうのに対する疑問ですよね。

田代　全部それが重なるんですね。先生たちの変化と幼稚園の保育の変化が。

津守　あれはね、本田先生がみえてから後なんですよね。だから昭和四四、五年かな。それで僕は、いわゆる科学じゃない学問、科学っていうのは何かっていうので、まずユングに取りついて（翻訳もほとんど出ていなかった頃です）、それから現象学のフェルメールさんについてた。それでそうやって非科学的な科学の学問を勉強し始めて夢中になった。レンガをこするのはレンガをこすること自体じゃない。一時間もかかってわずかおさじ一杯くらい石の粉を作ってお薬だと言う、あの情熱なんだ。細かい砂は、子どもの情熱のかたまりだって言って。

本田　あれで子どものすること一つ一つを丁寧に見るとか、丁寧に掘り下げるってことの意味が逆に現場で再確認されたことがあって、テーマの解体にそれが力を貸してるところもあるんですよね。テーマみたいなもので引っ張るんじゃなくて、その石けずりでも泥こねでも、そこから考えていくこ

とがいっぱいあるんじゃないか、っていう方向に変わっていく気もしますけどね。

津守　それには周郷さんの詩的な考えもあって。僕は周郷博さんの話が非常に面白く、現職研究会でいつも周郷先生に、頼んで話してもらった。あの人は、ギリシャ哲学の四原則っていうのをいつも言ってたからね、火と水と土と風と、って言って、「石をけずるっていうのは、火だ」って。

本田　その後の附属幼稚園の展開は、田代さんのほうがよくご存知ではないですか。

田代　もっとだいぶ後です。私は堀合先生の保育は全然見たことがないんです。

本田　ああ、ご存知ないですか。

田代　堀合先生の頃の雑誌というのは。

本田　堀合先生自身は編集委員の一人として協力なさったかもしれないけれども、むしろ、津守先生の強力なパートナーとしてのご活躍ですね、雑誌の上では。もう一人いらっしゃいましたね。

津守　村井さん。それから村田さん。守永さん。堀合さんが一番その黄金時代の誘導保育の伝統を意識していた。そしてあの人は、本質論にちゃんと耳を傾ける人なの。今本田先生が言った、誘導保育はほんとに引っ張ってる保育だって気がついたところから堀合さん自身が変わっていく。なかなかラディカルなところがある人なんです。それで、その他の先生たちも、みんなそれぞれなんですよ。

本田　それが附属の面白さでもあったんですよ、それぞれで。

田代　子どもが変わったというのは、本当に変わったんですかね、そのあたりで。

本田　変わったのかどうか。堀合先生は、子どもが変わったって言ってらしたけど、でも子どもが変わったといっても、子どもだけが単独で変わることはないですからね。堀合先生がお変わりになったのと、やっぱり相乗関係じゃないかなと思う。「子どもが変わったわ。熱気を持って盛り上がらない。今の子どもに必要なのは自分

のやり始めたことをじっくりとさせてあげることかもしれない」って言っていらっしゃるのがちょうどその、石けずりの時期なんですね。だから、ああ、これは相乗効果かなと思ったことがあるんですけれどもね。

田代　そう感じるのもまた、聞いただけではなくて子どもとの関係の中でご自分で。

本田　ええ、子どもとの関係できっとね、あの方、キャッチする方でしょうね。

田代　そう思うといつの時代も子どもはこう変わったといって、自分の見方が変わるたびに今必要なのは、っていう風に考えていく。それは保育者自身の側の変化ですか？

田代　和美氏

本田　そうでしょうね。だからそういう意味では言っちゃえば変わらない、いい関係を……。

津守　ずっとこう、歴史を考えてみると昭和三〇年代からの、僕が知ってる時代からも子どもは変わったといえば変わったし、変わらないといえば変わらないんだけれども、今、この現代を考えてみるとね、子どもが変わったかどうかっていうよりも、社会全体がひっくりかえっちゃってるね。だから、そこに、対応していく「大変さ」っていうものがあるわけ。大学でも、幼稚園でも、学校でも。昭和三〇年頃、戦後のところは、たしかに世の中は変わったんだけど。戦争に負けて、軍がなくなって、だけど実は早すぎるくらいに日本が復興して、それで、その戦前から戦中戦後って引きずってる何かがあると思うんですよ。それが今ここのところで、全部ひっくりかえっている。

本田　すぱっと切れたんですね。違うものがすぽんと

入ってきた。

津守　むしろ非常に大きな変わり目と言えるような気がする。

田代　そこへの対応の仕方が、大人自身がもう見えなくなってしまっている。メディアの影響だって、本当に大きいと思います。

本田　例えば私なんか今、大学生を教えてますとね、なにしろ若い人の五〇パーセントが大学に来る時代だから、大学で直面している問題っていうのがすごくあって、それは、もしかしたらこちらの考えてる学力観がもうずれてるのかもしれないとも思うんですよ。そういう意味で、今の若い人たちが、これが足りないと思えるものがものすごく増えているのに比して、幼児の場合はそのずれは少ないのではないかって思うのね。そうするとやっぱり、一番基本的なことを大切にしてまだやっていける場というのは幼児教育じゃないかって気もしますね。上に行くほど、それはすごくなっちゃうんですよね。私たちはもう、私たちが考えてることは全部、もしかしたらずれてて、この人たちのために何をしてあげたらいいかっていうことが、全く見えてない。そんな人が教授をやってるんじゃないかという気がするんです。幼児の場合は、ずれはそれほど大きくないでょう。やっぱり人間の基本的なものっていうのは、あの二〜三年の間に、きちっとするという意味では変わらないんじゃないかって気がしますね。だから幼児教育って、状況の変化の中で、一番基本的には変わらないで、一番大切なものを培える場所かなって気がするんです。

津守　幼児っていうのはありがたいことに、一時間一緒に遊ぶとね、もうそれでコミュニケーションができちゃう。

本田　世界が共有できちゃうんですよね。

これからの『幼児の教育』は――

津守　この頃の『幼児の教育』は、現場の方々が、書くものが、とてもいい。

本田　多くなりましたね。とてもいいですね。

津守　昔はね、現場の人に頼むのはとっても大変でした。

本田　いい保育をしてらっしゃる方も、お願いすると変なもの書いちゃうことがある。困ったことがよくありましたけど。

田代　確実な方に頼むと、いつも同じになっちゃうし。そこが難しいです。賭けのようなところもあって。

本田　ただ、最近はやっぱりちゃんと自己を表現できる方が増えたのかなって気もしますけどね。

津守　やっぱり、それにそういう編集者のご苦労を感じますね。

本田　そうですね。それと、一時のようにこういう雑誌が新しい情報を伝えたりする必要がなくなってきてるでしょ。だから、逆に何か考える、静かに考えるような記事が出ればいいのよね。情報発信っていうのはもう、他のことでいろいろできるから。だから、『幼児の教育』の今の一番の生命線ってそこかなっていう気もするの。

津守　現場の人がほんとに、これどうしたらいいのかなんて思うことをじっくり考えてくれるような、そういう記事っていうのがなかなか見つからないからね。みんな適当にうまくまとめちゃう。そうじゃくてもっと破れたままに、ありのままに、しかし、その中で何かが見えてくるっていうようなそういうことを書く方々も増えたし、それからそれをそうやって引き出す方々も、こうやってちゃんと一生懸命そこを引き出そうと思って……。

本田　書くことでご本人がたぶん見えてくるわけでしょ。だから原稿依頼のチャンスは、人を育てるというか、人の思考を深めさせるチャンスになってるんですよ。だからこの雑誌の機能って、そういうことかなって思って。ここから何か新しいものを学ぶとかっていうん

じゃなくてね。自分の保育をどのように考えるかということを、他の人の書いたものを見ながら考える、何かそういう媒体になるのかしらって思いますけど。新しい情報のキャッチだったらいくらだって他でできるから。

田代　なかなかやはり、それも大変なのかなと思いながら先ほどの編集協力委員のようなかたを……。あまりにも狭いところでやっているのでどうしても枯渇してしまうし。

本田　人の探し方ってむずかしい。同人誌みたいになるんですよね、どうしても。

田代　そうなんです。ただ、そうやって編集協力委員のような形で人を広げると今度また、みなさんに集まってもらう時間を作るのがとても大変になってくる。

津守　そのエネルギーは大変ですよ。それでね、倉橋先生と、ほんとにごく最初の頃、「こうやってやってると、だんだん、だんだん雑誌が、細くなってしまうかもしれませんよ」って、僕がそんなことを言うと、先生が「それでいいんだよ、売れなくてもちゃんと本当のことがそこに出てればそれでいいんだよ」ってそう言ったの。それで非常に、僕は力づけられたし、ああ、それでいいんだなと思った。そしたら、一〇〇巻まで続いたんですよ。

本田　売れなくはなりましたけど。

田代　なかなか若いかたに広がらないので、ほそぼそと。

津守　一〇〇巻っていうと他にはないでしょう。だからこれは、大いに宣伝する価値があるわけですよ、それだけで。

本田　だいぶ前に「教育系の雑誌で、一〇〇年近く続いている雑誌は何か」って『幼児の教育』がテレビでクイズの問題になったことがあるくらいだから、他にないということでしょうね。そして、編集者が変わっても一応主張が変わらないっていうのが珍しいんですよね。

津守　それから、こうやって雑誌編集を、早くから僕なんかも言われてやったけど、どうしても自分で書けない時期っていうのがありましたね。

本田　絶えず書いてらっしゃるような印象はありますけれども。

津守　最近は心がけて。お茶大を辞めてから僕もこれ書かないと申し訳ないっていうそんな思いでね。

本田　編集者をしていた頃は、私、編集者って書く者じゃない、人に書かせる者だというポリシーがあったんですよ。だから、その頃はあまり書かなかったんですけど。まあ、辞めてからは、編集者のご苦労を思って、隔月連載ぐらい書いたほうが協力的かなと思って書いてます。編集していると書けないんですよね。

田代　何か事務的なことでけっこう追われてしまって、あれはどうしましょう、これはこうなってしまいましたっていうのに。

本田　穴埋めだけですよね。

田代　それを津守先生は三〇年やられて。倉橋先生の時代はご自分で書いてしまったというようなことがあったっていうのは。

本田　あの頃はやっぱり『幼児の教育』って「僕」だと思ってらしたのでは。

津守　そういう時代がたしか数十年あったわけですよ。

本田　そうなんですよ。今の日本の幼児の教育も「僕」で、この雑誌も「僕」っていう時代があるんですよ、倉橋先生は。

津守　それで、あの間に和田実が編集主幹になっています。それから堀七蔵。『幼児の教育』は今、何なんでしょうね。

本田　一時、ちょっと津守先生も『幼児の教育』は「僕だ」っていうような顔をしかけてらしたんだけど、そのあと、私が引き継いでから、そういう顔がなくなっちゃったんですよね。

津守　そういう点では、子どもっていうと学校、幼稚園児・保育園児、それ以外の子どもの顔っていうのがない時代なんです。本田

先生がよく言われるように。これは必ずしも幼稚園の先生だけのものじゃなくて、もっと子どものことを考えて、しかも幼稚園の先生にもちゃんとした本式の保育観をもって、こういう広がりを本来は持つ時代なのかしらね。

本田　そうですね。

田代　逆行して、やっぱり児童学科的に。子どもが真ん中にあって、いろんな角度からという方に書いてもらうっていうのもこれから考えていかないといけないのかもしれませんね。

本田　そうですね。皆川さんが編集を手伝って下さった時、例えば森洋子さんの「ブリューゲルの『子供の遊戯』」、あれも延々と続いて結果としては立派な仕事ができた。それから、海老沢敏さんのも。津守先生がラジオを聞いてらしてふっと思いついて、それで皆川さんがその話を聞いて、即座に、海老沢さんを訪ねて、書いてくださいってお願いしたのが、「ルソーの夢」ですか。あれも、立派な本になった。

津守　そうです。あれはね、ラジオを聞いていてこれは本物だと思ったの。本式、本物の人をつかまえる。

本田　初めは二、三回ってお願いしたら、海老沢さんも凝り性だから延々と続いて調べ直したり、ドイツに行ったり、大変なことになっちゃって。でももう、皆川さんは苦労しながらつき合って、あれも、大変立派なお仕事になりましたでしょ。美術史の森洋子さんもまさにそうでね。倉橋先生の頃、よく絵の解説が出ましたでしょ。あれ、面白いからって、森さんにブリューゲルの子どもの遊戯の絵の解説を一〇回くらいしてくださいと頼んだら、あの人も凝り性だし、何しろ、森ビルの一族でお金もいっぱいあるから、あっという間に資料を取りにベルギーに飛んでいったり、オランダに飛んでいったりして。あれ、二十何回続きました？　それで立派な本になって、『ブリューゲルの「子供の遊戯」』（未来社）、あれは賞をたくさんもらってベルギーからは勲章までもらったんですね。彼女は今でも、自分が一流になれたのは『幼児の教育』のおかげだと言ってらっしゃるけれ

ど、そういう仕事もある時期にしてたんですね。海老沢さんの『むすんでひらいて考　ルソーの夢』（岩波書店）も、賞をもらったりしてるんです。こんな雑誌じゃなきゃ、お書きにならなかったテーマというのが、ああいう方にもあるんでしょうね。子どものことなんてのは、頼まれなければやらないけど、やってみると掘れば掘るほど面白くて、ご自分の仕事が広がっちゃったという方が結構いらっしゃる。文化のジャンルに広げたことの喜びっていうのはそういうところにありましたけど。

津守　だからこの人、これこれって思ったら大胆に、どんどん飛び込んでいく。編集者の得ですよね。でも一〇〇巻なんて夢のようで。

田代　でも苦しい。毎月……。

津守　大変。一〇〇巻でやめちゃうって手だってあるんですよ。

田代　なかなかやめるというのは難しいですよね。誰が幕を引くのか……。

津守　まあ自然にくるまではやるんでしょうね。

本田　老衰するまでですか？

田代　長寿です。

津守　何でもかんでもやらねばならないなんて思わないでさ、自然に続いているものを無理してやめることもないし。

本田　長寿を祝ってということで、ご苦労様です。おめでとうございます。

田代　ありがとうございました。

――終――

「『幼児の教育』史」点景

―一〇〇巻の重み・改題の意図・幻の昭和二〇年一月号―

河合　隆一

『幼児の教育』が一〇〇巻を迎えられたとのこと、おめでとうございます。

雑誌としての大変な足跡であること、教育界に大いに誇っていい数字だと思います。『婦人と子ども』創刊以来、子どもを思う心を脈々と受け継ぎ引き継いでこられた先生方に心からの敬意を表します。

一〇〇巻の重み

先年、私は倉橋惣三年譜をつくりました。未だに資料の発見が続き、完成途上状態なのですが、その作成作業の中で、まずびっくりしたのが、倉橋惣三の雑誌への寄稿の数の多さでした。そして寄稿雑誌の種類の

多彩さには目を見張るばかりでした。当時の教育者の中でもトップ・クラスの寄稿量ではないかとさえ感じられます。まだ完全なトータルとは言えませんが、保育雑誌八、教育・心理学雑誌六〇、児童福祉雑誌七、児童雑誌・絵本七、婦人家庭雑誌二三、総合誌・機関誌・PR誌など二一、新聞一二、合わせると一三八もの雑誌・新聞などに寄稿していたことがわかりました。あらためて倉橋惣三の活動・視野のマルチぶりに舌をまいてしまいました。

これらの倉橋惣三が寄稿した雑誌のうち現在も続いている雑誌がいったいいくつあるでしょうか。

出版科学研究所へ行ってしらべてみました。教育関係雑誌で、なんと創刊以来現在まで連綿と続いている雑誌の筆頭に『幼児の教育』一九〇一（明治三四）年創刊とあるのです。

そして『教育研究』一九〇四（明治三七）年、『学校教育』一九一四（大正三）年と続いていました。一九〇〇年代初頭に創刊されたもののうち、倉橋惣三が寄稿した教育雑誌で現在残っているのは『幼児の教育』と『学校教育』の二誌のみでした。

これだけのデータから見ても、『幼児の教育』は保育界のみならず教育界に誇っていい歴史、存在であると言ってもいいと思います。

ついでながら現在もっとも古くから現在まで続いている雑誌全体からひろうと、まず、『薬学雑誌』一八八一（明治一四）年創刊、ついで、『法学協会雑誌』一八八四（明治一七）年創刊、『国家学会雑誌』一八八七（明治二〇）年創刊、『中央公論』同年創刊と続いています。

それはともかく、倉橋惣三が寄稿した多くの雑誌、特に教育・心理関係の雑誌のほとんどが現在は図書館でしか見られないということに、雑誌の消長は世の常とは言うものの複雑な思いを禁じ得ません。倉橋の恩師元良勇次郎が主宰し、倉橋が『婦人と子ども』にかかわる前は、海外の新しい幼児児童に関する文献を読みこなしては紹介して実力を養っていた『児童研究』、

多くの論文を寄稿していた『教育論叢』『教育時論』、教育ジャーナルとして独自の存在だった『教育週報』など、活発な出版活動を続けていた多くの教育雑誌は昭和一五年ごろから二〇年の間に出版統制、資材の不足などから廃刊、休刊となっています。戦後復刊はしたものの続かなかった雑誌もあります。

こうして見てくると、大変なこの時代を歩み続けてきた『幼児の教育』の一〇〇年の時間の重みを改めて感じさせられます。

改題の意図

『幼児の教育』は『婦人と子ども』から出発し、『幼児教育』に改め、そして現在の『幼児の教育』となってきたことはすでに知られていることです。

大正八年一月号から『婦人と子ども』を『幼児教育』と改題したことは倉橋が「『婦人と子ども』を一つ並にいっしょにするのはよろしくない。おんなこどもという我国在来の古い言葉には、婦人をも、子どもをも軽侮したような怪しからぬ見方がある。（中略）従来のやや通俗的な名称から専門的教育雑誌にしなければならぬ」（『幼児の教育』昭和五年四月号）とその趣旨を後年になって書いています。ここでの改題は専門誌への脱皮でした。

それから五年後の大正一二年、当時の新聞の記事を発見しました。

「東京女高師の日本幼稚園協会で発行していた『幼児教育』と云う機関雑誌を、この七月号から『幼児の教育』と改題して頁数を倍加し一層内容を充実させて協会内部の機関誌とするのみならず社会的にも発展するそうで、十八日夜東京会館に教育界の諸名士や新聞記者を招待して披露した。」（読売新聞・大正一二年六月一九日付）とあります。

『幼児の教育』の七月号を見ると、口絵写真があって「日本幼稚園協会（幼児の教育）拡張披露の集い」というキャプションがついています。東京会館に集まった二二人の「教育界の諸名士や新聞記者」が写ってい

ます。巻頭には、会長の茨木清次郎が「本誌に多少の拡張を加え、従来の稍々狭き機関雑誌の体裁より、聊か社会的活動に進まんとしたのである。」と書いています。

単に「の」をいれただけのマイナーチェンジとも見える改題で、おおげさとも思える披露をした意味が納得できました。

雑誌の内容は、ページ数は倍以上となり、記事も童話、童謡、教材研究、さらには小説までも掲載して編集の幅を広げており、決してマイナーに止まってはいません。むしろ盛り上がる意欲が強く感じられる誌面となっています。

今まで私は、年譜を見るとき、大正一二年『幼児教育』を『幼児の教育』と改題、そして三年後の大正一五年に幼稚園令公布、と表面的にしか見てこなかったのですが、最初に引用した新聞記事と『幼児の教育』の記事と両者を合わせ見ることで、このときの小さな改題の奥にひそむ意図を初めてつかむことができました。

六月一八日夜の東京会館でどんな話が交わされたか、記録はみつかりません。しかし、当時の幼稚園令実現までへの多くの関係者の努力の一端を垣間見ることができました。

幻の昭和二〇年一月号

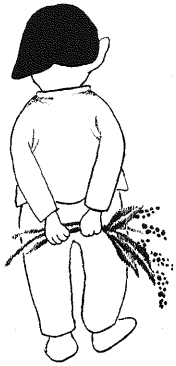
昭和一六年から二〇年の戦争をはさんだ時代、先述のとおりほとんどの教育雑誌はこの期間に休刊、廃刊に追い込まれました。そのなかで、昭和一九年四月号の「謹告」にあるとおり『幼児の教育』が保育関係雑

誌として残されました。倉橋惣三の著作の年譜を見ると、この時期は『幼児の教育』以外への寄稿はほとんどなくなってしまっています。

そして、昭和一九年の一二月号は発行されたが、昭和二〇年一月号から休刊ということになった、と『幼児の教育』の復刻版や他の資料にもあり、私もそう信じていました。

私が『子どもに生きた人・倉橋惣三』（森上史朗著）を担当し、資料探しをしていた最中、倉橋家から、また津守先生から風呂敷いっぱいの資料の提供を受けて誠に感動した日々がありました。（このとき新しく発見された資料をまとめて『倉橋惣三選集第五巻』となりました。）

倉橋家からお預かりした資料のなかに昭和二〇年一月一日発行日付の『幼児の教育』がありました。表紙ともで一八頁のざら紙のぺらぺらの雑誌でした。このときは不明にも、そうか戦争中の『幼児の教育』か、としか思いませんでした。それが著作年譜を作ろうと思い立って『幼児の教育』の復刻版をあらためて見て、はじめて休刊したはずの号であることに気づいたのです。表紙には左端に「倉橋先生」と女性らしい丁寧な文字が書かれています。先生への献本だったのでしょう。目次の文字のみの表紙です。内容は前号から続いていることですが、この時代の国民の錬成といっても幼児の保育ではスパルタ流の硬教育ではないという論、あるいは、幼稚園令の戦時の解釈と実践についての論、また、厳しい時代だから強い国民をつくり倹約の徹底が必要であるという論などなど、戦時下の幼児教育論がのっています。そのなかで、戸倉ハル執筆の「お山の杉の子」（吉田テフ子作詞、佐々木すぐる



作曲）の曲譜と振り付けのページが七ページもあるのが目をひき、ちょっとほっとします。しかしこの歌詞も後半は戦時色濃厚となっています。（ちなみにこの歌は終戦後、戦時色を取り去って平和的な植樹の歌として復活、よくうたわれました。）

この号の存在について何人かの先生方に聞きましたがご存じの方はありませんでした。この号はなんらかの理由で販売されずに終わったのでしょうか。

前年、昭和一九年一二月号には、この号限りで休刊という表示はありません。そして発見された二〇年一月号の巻末には協会の規則、注文規定などが例号通りの形で掲載されていて、ここにも休刊の表示は見あたりません。

この二〇年一月号には「第四五巻第一号」という表示があります。そして復刊された昭和二一年一〇月号にも同じく「第四五巻第一号」という表示があります。この重複はなぜだったのか、などいくつかの疑問がのこります。

保育の研究とははずれたことですが、元編集者として、また倉橋文献を調査している者としては疑問としたいところです。ご教示賜れば幸いです。

以上、狭い私の調査の中で発見したこと、感じたことを書かせていただきました。

最後になりましたが、倉橋惣三という大きな存在への端緒をご教示下さった津守先生をはじめ、沢山の本誌に携わったかたがた、どれだけ編集者としての私に栄養を与えてくださったか測りしれません。有り難うございました。

『幼児の教育』がもっともっと筆者や読者を広げられて、第二世紀も続いていくことを祈ります。

（元・フレーベル館編集部）

『幼児の教育』と私

素人編集者の思い出

赤間　峰子

『幼児の教育』がおめでたい一〇〇巻をお迎えの由、私はその中のどの辺りでうろうろしていたのか、と当時のもろもろが雑然と入っている段ボール箱を押し入れの中から引っ張り出しました。なつかしい物が詰まっていて思わず見たり、読んだり、時がたちました。

初めのうちは、前任の井上（旧姓、寺井）さんのなさることをただただ見ていて、こんなことが私に出来るのだろうかとだんだん心細くなりました。何しろ、最初にお話のあった時、私をよく知っている主人はすぐお断りしてこいと言い、私もそのつもりで幼稚園にうかがいました。それが、津守先生とお話ししているうちに何となく、「やってみます」とお返事してしまったのは今もって不思議です。もちろん帰宅してから主人に

は大変怒られました。初対面の私を包み込むような津守先生はもちろん、私には保育実習科時代の恩師、周郷博先生が当時園長先生でいらしたという甘えがあったのかもしれません。

主人に逆らってまで始めた仕事ですので、途中でやめるわけにはいかない、との最初の意気込みは、でもだんだんにめげてゆきました。実際の作業はフレーベル館の編集部のはしの机でしました。何も知らない私にフレーベル館の方達が呆れていらっしゃるのが、鈍感な私にもさすがに分かりました。それなのに親切に一から教えて下さった方々に心からお礼を申し上げます。もちろん、ご結婚を間近に控えていらした井上さんはどんなにご心配だったこととお察ししお礼を申し上げます。

編集会議といういかめしい話し合いも、津守、本田両先生のソフトムードに支えられてだんだん私も恐る恐る発言できるようになりました。人と人の出会いということを考えて、原稿依頼は出来るかぎり手書きに致しました。それを珍しいと喜んで下さった方もありました。反対に心ない言葉にお叱りも受けました。失敗のほうが多かった四年間でしたがいつもそれをカバーして下さる方がありました。

周郷先生をかこむ座談会、対談はとても印象に残っているものがたくさんあります。薄暗い園長室で楽しそうに話し合われた串田孫一さんとのお話は詩情あふれるものでしたし、釜が崎の家庭保育の家でよちよち歩きまわる子ども達、それを追いかける保母さん達のなかでエリザベス・ストロームさんと、日本人とドイツ人の様々な考えの違いを

熱っぽく語られた二時間あまり、日帰りで大阪へ行った時のことなどついこの間のことのようにおもいだされます。私はその後主人が逝き、受洗した教会がルーテル教会であったため、何回かストロームさんにお目にかかっているのも不思議なご縁です。

現在、幼稚園の園長先生になられた服部公一先生との対談の時は赤坂の服部さんのマンションに夜、お伺いしました。周郷先生は音楽、ことにバッハがお好きでご自分もオルガンをひかれました。お二人のお話も尽きることなく、服部先生は私が主人に怒られないかと心配してくださいました。作曲家から園長先生になられた時、とてもお懐かしく、お便りを差し上げたところ先生もそのことを覚えているとお返事を頂きました。

故人となられた浅野順一先生は、周郷先生の信仰の父ともいえる方でしたが「クリスマスの時、渋谷を歩いていたらきれいな賛美歌の歌声が聞こえて来たの。思わず扉をあけて入った所が浅野先生の教会だったの」と遠い昔を思い出しながら、とつとつと話された先生のお顔は、はっきりと私の瞼の奥に残っています。

津守先生は、お時間がおありの時はよく幼稚園の子どもの中にいらしてじっと子どもを観察していらっしゃいました。そして私が驚いたのはご自分のお子さんの場合も同じで、お子さんがたの可愛らしい絵はもちろんたくさんの記録を残していらっしゃいます。当時私の娘たちは、高校、中学在学中でしたが、私の手元には彼女達の幼い頃の記憶としては写真しかありませんでした。つくづく娘達に申し訳なかったなと思いました。

本田先生からはたくさんの童話との出会いを与えて頂きました。童話も絵本も子どもだけのもの、という旧い考えを根本から変えて下さった先生は、つい先日お茶の水女子大学の学長になられ、〝お茶大で初の女性学長誕生〟との報道に、文部省もたまには良いことをするのだなあと思いました。新聞にのった写真の先生は、昔より少しふっくらとされ、昔と同じように上品な笑顔で、お懐かしさで一杯になりました。

そのころ、ラジオで初めて滋賀県にある止揚学園という重度の心身障害者のための施設の園長、福井達雨先生のお話を聞き、多分『幼児の教育』と関わってそんなにたっていない頃だったと思いますが、それまで味わったことのない、暖かい感動を受けました。すぐに編集会議にかけて執筆をお願いしました。思いがけず福井先生はすぐにお受け下さり、しばらく連載までして下さいました。思い立ったらばすぐに行動に移す（あまり深く考えずに）私は、多分五〇周年だったと思いますがお招きを頂いてとんで行きました。その時握手をして下さった先生の大きな手の暖かかったこと、いまだに忘れません。そしてずっと年末にはささやかな献金をおささげしています。そのたびに奥様が先生や園生の方達の様子をお知らせ下さいます。

この福井先生ばかりでなく、この仕事をさせていただいたおかげで、私の世界は限りなくひろがって今に続いていることを改めて思います。

お世話になりました多くの方々の中には、周郷先生をはじめ帰天された方もいらっしゃいます。ご冥福を祈るとともに、貴誌のますますのご発展をお祈りいたします。

〈再　録〉

婦人と子ども（幼児の教育の前身）創刊当時
のこどもと其頃の幼稚園の状況に就いて

東　基　吉

五十年前というと随分遠い昔です。然し静かに当時を追想しますと、共に仕事をしたり、勉強したりした今は亡き恩師や先輩や同僚達の風貌が、まざ〳〵と眼前に浮んで来るし、自分の成した事や、遭遇した事柄なども次々に浮び上つて来ます。今日になつて見れば何でもない分り切つた常識的な事柄が、其当時は非常に重大なことのように考えられたりなどして一人で微笑さへもしないで居られないようなこともあります。

私がお茶の水の女子高等師範学校に奉職したのは明治三十三年の四月で、其前年高等師範学校を卒業、岩手県師範学校附属小学校主事に就任して居たのを、恩師黒田定治先生（女高師教授）の推薦で来つたのでし

た。始め先生のお話では、附属幼稚園に勤務するのだとのことでしたので、当時幼稚園教育のことなどには全く無知であつた私は、ちよつとガツカリしましたが、兎も角幼稚園主事の中村五六氏に会つて見なさいといふので、先生の紹介で本郷真砂町の中村氏宅を尋ねて面会しました際

「実は僕幼稚園のことは何も知らないんですが」

と言つた所、中村さんは

「いゝさ、日本中に誰だつて知つたものはありませんからね」

と言つて呉れたので、夫では幼稚園のイロハから勉強してかゝろうと決心して、三十三年の四月に女子高等師範学校助教授に任ず「幼稚園批評係り」を命ずという辞令を受けたのでした。

当時の幼稚園の組織は、満三年からの幼児を入園させて三組（一組四十人）職員は中村主事の下に保母が清水鶴（後下田義天類氏に嫁した）氏を筆頭に神門とも、稲石やす、林ふみ、松村久の五人、他に分室というのがあつて、これは三年から六年までの幼児を一組にした下層階級の為のもので、北野晴という保姉がこれを担任して居ました。其後本園の方は神門稲石の二人が去つて其後任に雨森釧、武井綱技の二氏が来任しました。

夫から附属幼稚園には保母養成の機関があつて、保母練習科と名づけて居ました。高等女学校の卒業生を入学させ一年で卒業、保母の免状を得させたもので、私の赴任する前から出来て居て、其後何回か卒業生を出しましたが、大低一回の卒業生は十人以内で、皆地方幼稚園の主任保母として、招聘されて行きましたが、卒業生の中には相当確りした人も居て地方の幼稚園でよく働いて居ました。

何故私が此処に採用されたかというと、これは後から分つたことでしたが、当時学校内での附属幼稚園の評判が甚だかんばしく無かつたようで、つまり幼児教育研究機関として一向何もして居ないじやないかというようなことが、時々言われたように思われた。尤も

附属高等女学校だつて、附属小学校だつて格別女子教育や児童教育上の研究など発表されたとも思えなかつたのですが、（附属高等女学校主事は篠田利英氏附属小学校の方は高浦丈夫氏）何に致せ、お隣りの高等師範の附属小学校（神田一つ橋所在）では樋口勘次郎氏などが音頭を取つて新らしい教育主義だとか教授方法などを盛に機関雑誌に発表したり、所々で講演したりして居ますし一方此頃は又児童研究ということが盛んで、高島平三郎氏が雑誌「児童研究」を出して居り、殆んど全国的に児童研究の熱が昂まつて来て居ました。そうした形勢の下に在つて、女高師の附属は何も発表しないし、自然影が淡いように見えたのです。尤も幼稚園が特に評判がかんばしくなかつたように思われたのは、一つは中村主事の性格からも来て居たようです。中村さんは実に立派な人格者で、誰にも親切で、腹にわだかまりの無い、竹を割つたような方で、私はいつも尊敬と親しみを感じて居たし部下の保母達にも尊敬をされて居ましたが、一面何方かというと少し社交性に乏しいようでよく人を皮肉つたり、いやがらせを言つたりします。そこから人に誤解されたり反感を持たれたりする、夫が自然中村さんの主宰する幼稚園の方にも響いて来たようにも思われます。そこで、幼稚園が一向何もやらんじやないかといわれるのに対して中村さんは「部下の保母達は皆女で、日々保育の仕事に忙殺されて居るのだ、研究などやる暇はありやしない、研究をやれというなら我が輩の相棒に一人確りした男を入れて貰いたい」というようなことを言い出して、結局この提案がいれられて其結果私が採用されることになつたのらしい。中村さんのこの提案を強く支持されたのは、学校職員の中でも私の恩師黒田教授であつたろうと思われます。

私が赴任した頃、附属幼稚園で、保育終了後附属小学校や高等女学校、中学校へ転入した児童の学業成績を調査して其統計表を造って居まして、私が来てから其仕事を私が引き受けてやることになりました。これは他から入学した児童の成績と比較して、幼稚園保育

の効果を実証しようという計画であつたようです。所が幼稚園出身の児童が悉く、他の児童に比べて学業成績が優秀であるべき道理がないと思つたから、私がやつて見て二三年経てからやめて仕舞いました。がこれも、幼稚園が何もして居ないと言われる夫の対策の一つであつたようです。

これは学校内部のことですが、夫にも増して甚だ厄介千万なことは、一般幼稚園に対する世間の批評で、これが又多く教育者から出たものであります。当時私の尊敬して居た一人の知名の教育者など、直接私に向つて幼稚園不必要論から有害論までも持ちかけて来ます。其当時の不必要論というのは下層階級の家庭に取つては、幼稚園は要るかも知れぬが、よい家庭殊に母親が教育的意見を持って子供を育てゝ行く家庭に取つては不必要である。殊に三歳から学齢までの幼児は母の膝下で育てるのが自然なのであるといふので、この議論は西洋でも相当あつたようです。有害論は主として保育の方法から来て居るのでありまして、前に挙げたバルンハム氏の論評の中にも若干見えて居ましてて、これは相当程度御尤もな議論で、私が始終考えた点もこゝに在つたのです。内憂外患とはまさに此頃の附属幼稚園の状態であつたでしょう。

こんな状勢の時、とも角私は附属幼稚園職員室の一隅に私の席につき、夫から毎日保母諸君の保育見学、教生諸氏の保育練習参観に日を消しました。保育事項は遊嬉（遊戯の戯はいけないという中村さんの意見で嬉という字を用いて居た）唱歌、談話、手技の四で、各々三十分ずつに時間を配当して、各組時間表を作って居ました。

当時幼稚園に関する日本の書物は文部省から出した（確か和本三冊本）ものと中村さんの幼稚園摘葉（一冊本）夫に竹早町の女子師範学校長であつた林吾一氏の一冊本だけで、何れも米国もの、翻訳のようでした。其他に職員室に在った書物は全部アメリカ版のもの許り、夫に雑誌はこれも米国出版のKindergarten ReviewとKindergarten magazinの二種が毎月来ました。

夫で毎日そんな書物や雑誌を読破して、幼稚園に関する知識を収得することに努めました。フレーベル氏の「人間教育」や「幼稚園教育」という書物もこの頃始めて読みましたが、丁度育成会の石川栄司氏が、教育学書解説叢書を出版するからというので、私がフレーベル氏の「人間教育」を解説したのもこの頃でした。

私は当時流行の児童教育にはさつぱり興味を感じて居ませんでした。一度流行につれて「児童研究会」（校庭に大きな藤棚があつたので、夫に因んで始めに「藤陰児童研究会」と名つけた）というものを職員五六人で造つて見ましたが、誰も関心を持たなかつたものと見え其儘立ち消えて仕舞いました。児童研究などというよりは私の目的は近代科学に基礎を置く全教育体系の最初の一環として幼稚園研究と其改善とに在つたのでしたが、米国から取つたどの書物を見ても、前記の雑誌を覗いて見ても、どれもどれも皆一律にフレーベリアン・ドクトリンを祖述演繹したもの許りで一向参考になるものがないのに失望したのでした。然し其頃の保育の方法に付いて私の最初に気付いたものは所謂手技ですが、其取り扱ひ方が頗る神秘的で一寸外部の人には分り兼ねるやり方でした。手技というのは所謂恩物と作業Gifts and ocupationで、これはフレーベル氏の哲学的構想から割り出して作られた玩具で、御承知のように積木と小板片と箸（真鋳の細い棒）と豆かきしやごの四種で、立体から体の一部の面（板、面の一部の線（箸）線の一部の点（豆）という風に全体から部分に、具体から抽象にという風に作られて居ます。そしてこの四種の恩物は別々に取り扱われねばならぬのであつて、決して混ぜて使わしてはいけない。板は板で箸は箸で豆は豆と夫れ〳〵独立して平面上に排列させる。板や箸を立体的に例えば板を塀にしたり箸を旗の棒にしたりしてはいけないのである。作業の方は反対に点、線画、体といふ風に部分から全体に、抽象から具体にといふ風に組み立てられて居る。フレーベル氏はこれに依つて幼児に、この全体から部分に、具体から抽象にといふ天地間の自然の法則を会得

させようとしたのであるということです。フレーベル氏の恩物に関する其他の理論の全体系を、当時の保母達が、皆理解して居たとは思えませんが、何処の幼稚園でもこのフレーベル式の取り扱い方を金科玉条として忠実に守つて居たようです。神戸にエール・エル・ハウという米国の女性の経営して居る幼稚園があつて、私は行ったことは無かつたが、此女史などはフレーベル主義の忠実な実行者であつたようで、フレーベル氏の「母の遊戯」という本を訳して出版されて居ました。

御承知の通り、幼稚園は一八三七年フレーベル氏がブランケンブルグに創立したものでしたが、同五一年プロシャ政府から、フレーベル式幼稚園の設立が禁止され、其翌五二年にフレーベル式は瞑目したのでしたが、夫にも拘わらず一八五四年以来全欧羅巴諸国に幼稚園の普及発達を来したのは全くマーレンホルツビューロー夫人が、殆んどフレーベル氏の教育意見に宗教的感銘と熱情とを持つて、各国に遊説した結果だといわれて居ますが、我が国幼稚園関係者で、当時フレーベル氏の「人間教育」や「幼稚園教育」（大分難解の書物です）を読破したり感銘したりする人は一人もなかつたようです。が、幼稚園が他の教育体系から離れ近世科学を無視したような格好で、米国あたりでもやつて居たのは、フレーベリアン・ドクトリンに対するこの宗教的な熱情と感銘から来た結果だと私は考えて居ました。私はこの恩物の取り扱い方に付いて、意見を出して見たことも時々あつたが、「どうも旧慣墨守の力の強い保母さん達は一向顧みようとはしませんでした。若い保母さんの中には私の意見に賛成してくれる人もあつたようだが、年季をかけた古い保母さん達に遠慮して口を出さない。

丁度其頃近着のKindergarten Reviewにバルンハムという人の幼稚園保育法に付いての論文が出たのを読んで大に参考になつたし、またイギリスの心理学会から発行せられたPsychological Seminaryという雑誌に一会員の発表した幼稚園改造論 Reconstruction of

Kindergartenという相当長い論文は綿密な調査や統計に依つて現在の保育法の非教育的な点を指摘して居て、私の断片的な意見に科学的根拠を与えてくれた気がしたのでした。

次に幼児に歌はせる唱歌だつたが、これは極めて古典的なもので、吾々にさへ分り兼ねるような歌詞を古いメロディーで歌はせる。一例を挙げると

民草のさかゆる時と　苗代に
水せき入れてみしめなば　ゆたに引きはえ
八束穂のたりほの稲の　時あらむ

と云つた類で、この歌曲に手をつけて踊らせるのである。子供は歌詞が判ろうが判るまいが又メロディーが多少六ケ敷ても、歌わせれば喜んで歌うものだが、教育的に考えれば歌詞も曲も子供らしい子供によく判るものにしたいというのが私の考えで、時々妻（東京音楽学校卒業東京府立第一高等女学校教員）と相談して、簡単な童謡を作って職員会議に持ち出したのでしたが、何とか乎とか批評されて結局採用されない。

所が当時楽界の麒麟児とよばれた滝廉太郎氏（妻よりは二年後の音楽学校卒業）が拙宅にやつて来て「幼稚園で唱わせる唱歌を作ろうじやありませんか、奥さんが歌詞を作つてくれゝば自分が作曲するから」という話で、とう〳〵夫が纏つて「幼稚園唱歌」という名で共益商社から出版されたのが明治三十四年で、この本の中の一、二は他の人の作もあるが大部分は妻の作歌で、鳩ぽつぽだのお正月だのといふ唱歌は、今以て唱われて放送されたりしています。とも角、これで子供らしい唱歌が出来た。麻布の何処だつたかに、矢張りアメリカの女の人のやつて居た幼稚園があって、いつか参観したとき、六ケ敷い賛美歌を唱わして居たから「もう少しやさしい子供らしい唱歌を唱わしたら」と一寸不用意に言つて仕舞った所其婦人が「そんなのがありますか、作つて下さい」と反撃されて閉口したことがありましたので、この唱歌集が出来て、やれやれと思つたのでありました。然しこれは附属幼稚園ではあまり歓迎されなかつたようでした。一つは矢張り

古い保母さん達が、昔の儘のものを墨守する傾向が強かったこと、、もう一つは新入りの私が事毎に新らしい意見を持ち出すのに対する反感からでもあつたからかも知れません。けれどもこの唱歌の出来た当時、二葉幼稚園を経営して居られた野口幽香女史……この幼稚園は月謝といつて徴収しないで、幼児が登園すると其日に二銭づゝ持ってこさせるといふ下層階級の家庭に対する思いやりの深い方法を取つて居ました……や、女高師の音楽教師であつた吉田信太郎氏などは、丸で天来の福音のように喜んだり賞賛してくれました。

伊沢修二先生が丁度隣りの高等師範の校長であつたので、或日婦人と子どもの往訪記者として先生を訪ねて、先生が女高師時代の幼稚園のことを伺つて見ました折り、其お話の一節に次のようなことがありました。

「何しろ附属幼稚園が出来たのは明治九年で其頃は何も彼も分らずにやつて居たのだね、唱歌などもてんで分らぬ六ケしいもの許りだつた。其処へお雇い教師メーソンがヴイオリンを持つてやつて来て、ちよう〳〵を弾いてくれた所がさあ子供らは大喜びで、ワアツと、メーソンの膝に集まつて来たものでした。」

この時始めて、ちよう〳〵ちよう〳〵菜の葉にとまれの歌詞は伊沢先生の作歌であつたことを知りました。

夫から幼児に聞かせる談話ですが、これは庶物の話と人事の話とに分けて居ました、庶物の話というのは蝶々や蜂や蛙などの動物とか植物に関するお話で、子供の理科的知識を啓発するのが目的です。人事の話は所謂童話ですが、さて困つたことには庶物に関する話の材料として蜂や蝶々の舶来の立派な掛図はありましたが、童話の方には夫がない許りか、童話其のものさへ、小波さんが博文館から日本昔話…桃太郎やかち〳〵山などを出して居られる丈であつたので、一向見当らない、夫に今日では子供の絵本絵雑誌などが何処

の書店にも汎濫して居るのですが当時そんなものはさつぱり見ることが出来ないのでした。そこで私はグリムやアンデルセン其他日本橋の丸善に行つて西洋の童話の本をいろ〳〵探し出して、適当なものを片端から翻訳したり翻案したりしたものです。

名前は忘れたが其頃私に「絵ばなし」という子供相手の色刷りの絵の小冊子を出したいから編集してくれぬかと云つた人がありましたので、私は喜んで承知して、或る女学校の絵の先生を頼んで絵の方を引き受けて貰いました、そして何号かまで出しましたが、一つは私の編輯方法もまずかつたのかも知れませんが、五六号出してやめになりました。其時私の思つたことは、どうも日本の絵かきさんは動物の絵が下手だし、子供の絵もまずいということでした。子供相手の西洋の動物の絵を見ると、人間的表情を巧に猫や犬や山羊などに写して居て、夫等の動物が丸で人間のように笑つたり泣いたり話したりして居るかのように描かれて居ますが、日本の絵かきさんには夫が出来ない、夫に子供の顔や表情が旨く描き出されません、夫で折角期待したこの絵雑誌もあまり部数が出なかつたので短日月で潰れて仕舞つたのでした。

次に遊嬉ですが、これは共同遊嬉と自由遊嬉とに分けて居ました。前者は楽器に合わせたり唱歌しながら行進したり環になつたりして遊ぶもの、後者は庭で自由に砂遊や鬼ごつこや綱引などして遊ぶのです。この方の仕事には私の手はまだ届きませんでした。

が、とも角幼稚園の保育方法や保育事項などに付き改善に就いての幾らか纏まつた意見が出来ましたので、何日の発行でしたか、神田小川町の同文館発行の雑誌「教育学術界」に発表しました。当時東京市内小学校教育界の大御所を以て自ら任じて居た多田房之輔氏、氏は神田で幼稚園を経営して居り、又保母養成所を設けたり、東京府教育会開設の保母伝習所の所長をしたりして相当幼稚園には功労のあつた人で日本の小学教師という雑誌を出して居ましたが、其文を読んで「はあ、これはあなたの幼稚園卒業論文ですね」と云

われたことがありました。

前に記した如く、幼稚園に関する日本文の書物が米国本の簡単な翻訳書が二三ある丈けでしたから、明治三十四年「幼稚園保育法」を著述して日本橋の目黒書店から出版し次いで師範学校女生徒の教科書用として保育法教科書を著述して矢張り同書店から出版しました。明治四十年に同文館から教育大辞書の出版がありまして、其中の幼稚園に関する一切の項目を私が担当して記述しました。明治九年始めて附属幼稚園が創設（尤も京都市では其以前に設立されて居たという話です）されてから、こゝに始めて翻訳に依らない日本文の幼稚園に関する著述が出来たのであつて、私は自から私に満足を覚えて居るのであります。

其時分のことでしたと思いますが、本郷竜岡町の私の寓居に岸部福雄君が尋ねて来ての話に、

「大阪では此頃東式手技研究とか云つて保母さん達がしきりにやつて居る相ですよ」

といわれたので「へえ」と云つた切り何のことか分らなかつたのでしたが、其前の年が前々年かの明治三十七年の夏大阪の愛珠幼稚園での、三市連合保育会（大阪、神戸、京都の三市、会長は大阪府女子師範学校長大村芳樹氏）主催の保育法講習会に出席して私が講演した手技の取り扱い方に付いて保母さん達が引き続き研究して居るのだなと判つて、自分の話の反響が相当にあつたことに愉快を感じたのでした。

因みに記しますが愛珠幼稚園は大阪でも有名なもので、木造ではあるが工費八万円（現在の金に換算すると約一千万円以上でしよう）と云うので、東京でも流石は大阪だなと呼びものになつて居ました、私が講演に行つた時、其幼稚園の肝入り役は塩野吉兵衛といつた方でした。

× × ×

正しい幼稚園教育思想を成るべく早く一般に普及させたい念願から、いろ〳〵雑誌に執筆したり著書を書いたりしたのですが、「育成会」から発行する「教育実験界」という雑誌記者に渡辺隈川という人があり、

其人が私の話したリーベンシュタエンに於けるフレーベル氏とマーレンホルツビユーロー夫人との会見記事（Reminiscence of locbelの中の一節）を絵にして水彩画の大家渡辺審也氏に描かせ実験界に二頁大の口絵にして付けたのなども、今では嬉しかつた一つの思い出です。

然し、所々で講演したり著述をしたり余所の雑誌に執筆したりして居る丈けではこの念願は達せられません。自分の手に研究なり意見なりの発表機関を持つて居なければなりません。其処で考え付いたのは当時存在して居たフレーベル会…これはいつ創立されたのか知りませぬが、私が来つた頃毎年一回総会を開いて会長高嶺秀夫先生（女高師校長）の開会の辞や保母さん達の研究発表などがあつたようです。…の機関雑誌を発行することでした。所が雑誌発行に付いては先ず金が費るがフレーベル会には無論一文だつて金が無い。それでこれは本屋にやらせるより他に途がなかつた、幸い、日本橋に金昌堂という書店があつて、其店の主人が自分の出版書籍の広告機関として雑誌を発行したいと思つて居た所であつたので、其主人と話し合つて其処から出版して貰うことに話を決めた。そこで私は明治三十四年のフレーベル会の総会にこの機関雑誌発行の案を提出しました。会費月十銭で毎月雑誌一部づゝ配布される丈けで別に会員の負担になる訳でもなし又会の金（無論無いのではあるが）を費消する訳でもないのだから、この提案は異議なく可決されました。

そこで雑誌の名を何とつけるかという段になつて中村さん、盲唖学校長の小西信八先生、黒田先生、多田房之輔氏などを幼稚園に集まつて貰つて相談しました。最初の私の考えでは幼稚園の機関雑誌だから純然たる保母育専門の雑誌にしたいのでありましたが、夫では一般に売れないから書店では承知してくれません。可成一般向にして家庭でも教育者の間でゞも読まれるものにしなければならないということになつて、其処で雑誌の名前も「婦人と子ども」ということに決

めたのでした。これはフレーベル氏が「子供をよくするには子供の教育と共に女子殊に母の教育が大事である」といって女子教育を重んじたという所から、この名前を付けたものであります。

夫から雑誌発行の条件は次のようでした

1編集一切は私が担当する。

2紙数は一部菊版八十頁とし定価は十銭とする。

3発行部数の中三百部は書店からフレーベル会へ納付する。これに対し会からは実費一部五銭として三百部代を仕払う（当時フレーベル会員は百五十名か精々二百名位であったと思いますが、会から夫れ夫れ関係者の知名の人達に寄贈しなければなりませんから三百部を納めて貰うことにしたのです。）

4残りの部数は書店で発売し売れ高に応じて印税を会に納める。会はこれを寄稿者への原稿料を支払い、残つた分は会の収入にする。広告料は書店の収入とし、会の広告料は無料とする。

まあ大体こんな所でいよ〳〵「婦人と子ども」が生れ出ることになりましたが、こゝで面白かつたことは雑誌の表紙の問題です。名前の文字は高嶺会長に揮毫を願うことにし、表紙の意匠は荒木十畝（学校の絵の先生）氏に頼むことにしまして、さて出来上つた。所が金昌堂の主人がこれを見て苦い顔をして首をかしげる「どうもこれでは絵も字も渋すぎて一般向がしません」と云います、実は私もさう思つたのです。十畝氏はゲーテの色彩論など持ち出して緑色の地に黄色のは、その蔓と葉とを模様化し下の方に白ぬきに撫子をあしらつて、夫で母と子とを表徴してるのですが、何分渋くつて地味でパッとしないです。夫に会長は達筆なのですが、惜しいことには雑誌の表題の文字として素人向きがしません。私も弱りましたが、今更書き直してくれなどとは無論云えませんし、まあ〳〵と云つて金昌堂を承知させて仕舞つたのでした。

そこでいよ〳〵「婦人と子ども」創刊号の編集に取りかかつたのでしたが、何分私に取つては始めての仕

事であり、今日でこそいろ〳〵各方面の雑誌が花園に百花の咲き乱れたように店頭に広がつて居ますが、其頃は子供の雑誌では確か博文館から出して居たと思う少国民とか、同じく婦人雑誌では「女学世界」、石川正作氏の店から出して居た「女子の友」、夫にもう一つ何処かゝら出して居た「明治の家庭」位のもので誠に寥々たるものでした。其処へこの道で全く無経験な私が、一人でやろうというのですから、今から考えると一寸無鉄砲のようでした。が、とも角やらねばならぬ。一般向きとは云つても「女学世界」や「女子の友」などゝ違つて、何処までもフレーベル会の機関雑誌として、幼稚園の研究改良の意見の発表、婦人と子どもの教育を主眼とした特色を持たねばならぬという考えから、始めの幾頁かを子供の領分とし、其処には私が丸善からあさり出した洋書から得た短扁の童話を四号活字でのせ、其他子供らしい記事に何頁かを割きました。そして会の記事や幼稚園教育に関する一切の事項は全部私が執筆し、母親欄の記事は専ら保母の林、松村両女史に依頼して書いて貰い趣味を主とした雑録欄は私の他に一、二の高師の学生に書かせ其他は文苑欄と共に一般の寄書に待つことにしたのですが、此方から頼んで書いて貰うものには原稿料を出さねばならぬ。其原稿料は凡そ一頁四十銭に決めて居ましたが、これが中に急届で、時には粗品で間に合わせることもありました。今日文壇で名を知られて居る野口雨情氏は当時まだ早稲田の学生であつて時々文苑蘭に作詞を寄稿してくれましたが、学生とはいへ、中々立派な作品で、他の寄稿の文は大低手を入れたり没にしなければならぬのに、雨情氏の作品にはいつも〳〵感歎させられたものでした。嘗て原稿料の代りにビール一ダースを届けたことがありましたが、其後、今から二十幾年か前、或雑誌者が知名の作家達に、最初に得た原稿料を聞いたことがありました時、野口氏は「婦人と子ども」に投稿して私からビール一ダースを贈つて貰ったことを云つて、これが自分の得た最初の原稿料といえるであらうなど、話して居たことがあつたよう

です。

夫に一つ編集上で困つたことは、雑誌の挿絵でした。一人二人知り合の画家は挿絵など描かないし、已むなく婦人の絵かきさんを紹介して貰つて、子供欄に描いて貰つたのでしたが、それがどうも私の気にいらない。然し発行期日が迫つたので、已むなく其儘挿入して原稿と一纏めに活版所に送りました。活版屋は神田橋の近くに在つた熊田活版所でした。

かくしてとに角幼稚園教育の発表機関が出来て、明治三十四年やつと其創刊号が発行されたのでした。創刊号ではあり、女高師附属幼稚園からの発行ですから、内容も相当豊富にし、装いも華かにして出発させたかつたのですが、其方に経験の無い私ではあり、実費一部五銭といつた貧弱な支出では、口絵の写真版一枚ですら附け兼ねるのでした。夫で漸く発行された第一巻第一号は、私自身が見ましても、如何にも田舎臭くつて垢抜けのしないものでしたが、夫でも「あゝよく出来た」など、お世辞を云つてくれる人も多かつたが、私自身としては内心甚だ物足りなくうら恥かしくさへあつたのでした。

其中号を重ねるに従つて、漸やく体裁も整つて来るし、雑誌の少かつた時分のことゝて、隅から隅まで読んでくれる人も多かつたし、家庭でも相当喜ばれて居たようでした。所でこの雑誌は保証金の納めて居ないものでしたので、何号と何号の発行の時でしたか、二度ばかり警視庁から呼び出しを受けて、其中の記事に附いて厳しいお叱りを受けました。其記事の一つは、確か松村久さんの書かれた浅草の「子供を借りて来て物貰いをする乞食」のことであつて、成る程これは学術には関係がない、見方に依つては警察の不取締を皮肉つたようにも取れないこともないから警察の怒るのも無理はなかつたでしょう。然しこんな所で争つて向うの心証を害するのは、結局損だと思つたから音なしく「今後注意します」と云つて、二度とも引き下つたのでした。警視庁に呼び出されたなどということが、

会長高嶺校長に知れたら大変だと思つてこのことは私は誰にも話しませんでした。が、学術雑誌として保証金を納めない雑誌は不自由なものだなあと感じたことでしたので、何とかしたいと考えはしたもの、五百円という大金は其頃出せもしないし、もう、発行所の本屋さんもそろ〳〵嫌気を催うして来たようですから、そんな金は出しもしなかろうしと思つて、其儘にして、つゞけることにしました。

書店がいや気になつたというのは、元来金昌堂は専ら教科書の出版発売をやつて居るので其広告機関としては、婦人、子供、家庭向きの、このような雑誌は不適当なのです。夫で創刊の前に一二回大々的に新聞紙に広告して、四五千部の発売を見たのですが、其後さつぱり広告をしないので、発売部数もだん〳〵減つて行き、一向利益にならぬという所からとう〳〵書店から解約を申し出して来たのでした。それは何巻の何号からであつたか忘れましたが、其頃はもう編集に付いても自信が出来たし、費用の収支も会員外に千四五百部も売れ、ば結構やつて行けると思いましたので、書店の解約申し出でに快よく応じることにして、いよ〳〵純然とフレーベル会のものとして発行発売することにしたのです。

さうなると私も一生懸命です。自分で往訪記者にもなり、広告取りにもなり、活版屋への使い走りから雑誌の包装発送何から何まで一人でやらなければなりませんでした。或る夏休みのとても暑かつた日、当時神田の一ツ橋に住まつて居たのでしたが、中村さんが手伝いに来てくれて、氷漬けにした御飯を食べながら、汗だくになつて二人で包装して発送をすませたりしたこともありました。発行部数は減りもしませんでしたが、増しもせずに、費用の収支も先ず順調に行きました。

其頃フレーベル会々員は何人位あつたかは記憶しませんが、全国幼稚園の数は明治四十年の統計年鑑に依ると、二百九十五で、保母の数は七百八十三人でありましたが、勿論会員はこの中の何分の一かであつたで

しよう。

夫から二三年経つてから私は附属小学校の批評係を兼任することになつて、其方に多く時間を取られるようになつたので、幼稚園へは和田実君という神奈川県師範学校の卒業生で、以前中村さんが其学校の校長時代の教え子であつた人が這入つて来ましたので、「婦人と子ども」の編集なり事務なりは一切和田氏にやつて貰うことにして、私は雑誌から手を引いて仕舞つたように記憶して居ます。

「婦人と子ども」を育て、行く上に付いては、黒田恩師を始め、本校職員二三の方から深い同情と激励とを受けましたが、別して東京盲唖学校の小西信八先生から何かと御親切な忠言を戴きました。こゝに附記して今は亡き先生方の霊に対して深く感謝の意を表する次第であります。

さて明治四十一年に私は地方の師範学校長に転じ、中村さんも其後奈良県師範学校長に転任され、安井てつさんが幼稚園の主事をやつて居られたようでしたが、倉橋さんのお見えになつたのは、安井さんの後かと存じますが、其倉橋さんの手で「婦人と子ども」も「幼児の教育」という名実共に立派な機関雑誌となり、こゝに「婦人と子ども」発刊以来五十巻を重ねるに至つたことは誠に喜に堪えぬ所であります。こゝに五十年前の思い出を記しましたが当時幼稚園に在園した男女の幼児達で、今生存されて居られる方々は、何れも六十近いよいお年になつて居られる訳です。実に五十年一夢の如し、この稿を草するに当つて、アルバムをくり広げて、其当時の先生や保母さん達の写真を眺めながら、暫くは懐旧の念に打たれるのでありました。

（了）

◇以上は、第五十巻第十一号十八頁から三十一頁を再録しました。

◇次の見開きは、第一巻第一号の巻頭と一頁を写真再録しました。左頁の始めに「子ども」と書かれているのは、「始めの幾頁かを子供の領分とし」たこと（本誌四十八頁）によります。

（編集部）

婦人と子ども　第一卷第一號

（明治三十四年一月廿九日）

發刊の辭

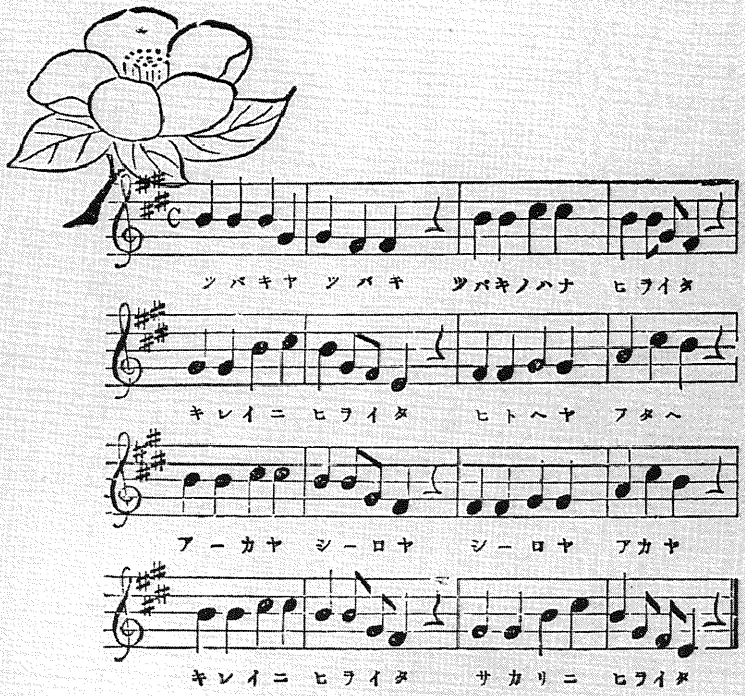
我國教育界刻下の急務は兒童教育法の研究なり。顧ふに兒童學の研究は、現今大に發達し來りたりといへども、尚未、完成の域に至らず。從つて其教育材料たる童話遊戯唱歌等の研究、亦甚だ、幼稚の域に在り。是を以て、學校幼稚園等に於ては、其の十分ならざるを知りつゝも、仍適切ならざる材料に依りて以て、兒童を教育せるもの、是れ實に現今の通弊なりとす。されば幼兒兒童の研究、其教育材料の精撰、其教育方法の確定、誠に方今我國教育界の急務にあらずや。

我國教育界、刻下の急務は婦人教育殊に母としての婦人教育の普及に在り。兒童を育成し、家庭を整理するは婦人の任なり。盜を捕へて後、繩を求むる者、人之を笑ふ、育兒の智識なくして、母たらんとし、家庭を整理する資力を備へずして、一家の主婦たらんとす。誰か之れに類せずとせんや。婦人出でゝ、一家を治む。先つ知るべきものは、育兒の智識なり。幼兒心身の發達は如何、之を修養助長せしむべき方法は如何、而して幼兒心身の自然的發達は獨り圓滿なる家庭に於てのみ望み得るものとすれば、之を形成するには、如何にすべきか。是れ方今我國婦人の當に力めて知悉せざるべからざる問題にあらずや。

我國教育界、刻下の急務は家庭に向つて好個の讀書材料を供給するに在り。凡そ婦人は其天職を盡さんがために、常に自ら修養を加へて、其智見を擴め、其品格を進め、其趣味を高尚にせざるべからず。此の如くにして其地位を進め、以て將來、良妻賢母となるに至るべきなり。方今、我邦、婦人に關する著術界は、甚寂寥たり。良好なる家庭的讀書材料は供給して、以て婦人の修養に資せしむること、これ實に、家庭教育上の一大急務にあらずや。

本會は、もと、幼兒保育の方法を研究せんがため、同志相集りて設立せるもの、創立以來茲に五年の星霜を經て、爾來漸く隆盛の運に向はんとす。今回更に規模を擴張し、こゝに本誌を發刊して、以て大に當時の急務に向つて、貢獻する所あらんとす。是を以て、本誌は一方に於ては兒童幼兒と共に語り共に歌ひ共に遊びて其師友たらんことを期し他方に於ては、母としての婦人、教育者としての婦人の好伴侶となりて共に兒童教養の任に當り共に高尚神聖なる家庭の快樂を得むことを期し而して現今一般女子教育の發達尚甚だ遲々たるものあるを以て更に此方面に於て滿身の力を盡して其普及を期せんと欲するものなり。

子ども



椿

つばきや
つばきの花
つばき

きれいに
ひらいた

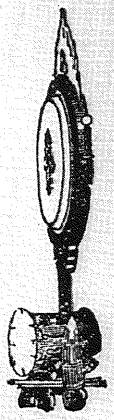
ひとえや
ふたえ

あかや
しろや

しろや
あかや

きれいに
ひらいた

さかりに
開いた



『幼児の教育』と私

「目時（めどき）」の頃

皆川美恵子

「目時（めどき）」という言葉があります。目のよく見える視力の強い若い年頃のことです。視力が衰えてみますと、青春時代を「目時」と呼ぶことは、実に言い得ていると感じ入ることしきりです。さて私がその「目時」の頃、『幼児の教育』の編集のお手伝いをしていました。七十六巻から八十三巻まで、およそ八年間を担当しました。津守真先生を中心とした時代と、津守先生が退官されて本田和子先生が発行人となられた時代にまたがっていました。

私の青春時代は、モラトリアムというのでしょうか、大学院の修士課程を終えていましたのに職業に就くでもなく、かといってもう学生でもない所在知れずの宙ぶらりんでし

た。そのような時、歴史ある『幼児の教育』の雑誌作りをお手伝いしたことは、特に父が喜んでくれたようです。毎月の締切に追われながら原稿集めに精を出している娘の姿を見ることは、父にとってどこか心落ち着くものがあったのでしょう。私が目を回して起き上ることのできないメニエル氏症候群という病気で倒れた時、校正をすませたゲラ刷りを、父がフレーベル館まで届けてくれました。

ところで、私が担当した編集時代、その間の記念すべき出来事は、復刻版の『幼児の教育』の出版です。しかし、高額の復刻版は、私のお財布では入手がためらわれました。ところが父が、それはやはり購入すべきだと強く言い出しました。そこで分割払いで求めることにしたのです。明治三十四年の創刊号から大正九年までの二十年間分の復刻版が、今、手許にあるのは、そういうことからです。なお復刻版の出版は、その後、第二期、第三期と続き、五十五年間分が出版されました。

もう一つ、編集につながる思い出の品が残っています。雑誌の表紙の絵は、フレーベル館の河合隆一編集長が、フレーベル館に関連のある画家さんに、特殊事情を理解してもらって特別に依頼していました。そのようにして創作された絵画を、借用させてもらったのです。絵は季節ごとに色を変え、二色刷りの印刷で表紙を飾っていきました。新しい年に、どんな画家さんが、どういう絵画を描いてくれるのか、楽しみでなりませんでした。

さて、七十七巻の表紙の画家として、河合編集長は梶山俊夫さんを選びました。出来上ってきたのは、墨絵に朱色の絵具で彩色された、男の子が逆立ちして、女の子と並んで

いるデザインの、躍動感に溢れた作品でした。昔話や民話に絵を描くことの多い絵本画家・梶山さんの子どもの絵は、河童のようでもありますが、洒落たモダンな味わいも漂っていました。目を大きく見開いて、こちらをジッと見つめている子どもは、どこか異次元の子どものようで、心惹かれました。

そこで或る日、思い切って梶山さんに連絡をして、原画がほしいので譲ってもらえませんかとお頼みしてみました。すると快諾して下さいましたので、早速、千葉のお宅へ作品を受け取りに伺ったのです。そうしますと梶山さんは、目がパッチリと大きくて、ギニョール人形のように目が印象的な顔立ちの方でした。すぐに絵の中の子どもの顔は、画家御本人の顔を写していることに気づいたのです。絵は、「遊ぶ子」と題されていました。こうして我が家には、七十七巻の表紙の原画が額に納まって掲げられています。あれからずっとずっと今にいたるまで、子どもの目は私を見つめ続けているのです。

当時、編集作業をしながら、私は、時折、児童文化探訪の記事を書かせていただきました。線香花火、紙風船、リリヤン、ローセキ、羽子板、雛人形などなど、おもちゃ作りの職人さんを探しては訪ね歩いたのです。玩具が作り出される工程を目で見ては、職人さんの話を聞き、記事にまとめていきました。子ども時代に遊んだ玩具の取材でしたから、こんなに楽しいことはありませんでした。いそいそと取材に出かけていきました。

現在、大学に勤めて、児童文化という授業を担当しています。また人形玩具学会に所属

して、日本各地に残る人形や玩具を見て歩いています。青春時代を振り返り、今の自分を見つめ直す時、『幼児の教育』がそれからの私の出発点であったことが確認できるのです。若かった私を育てあげてくれた『幼児の教育』が、その後も厳しい出版状況に見舞われながらも継続し、二十一世紀と共に百年を迎えたことは、嬉しいことこの上もありません。壊れゆくものが多い中にあって、揺らぎながらも揺るぎない『幼児の教育』は、人間に対する信頼を湛える器のように思えます。

さて私は、昭和五十九年十二月まで編集に携ってから、編集の仕事を辞しました。その年の九月に父が亡くなってからというもの、私は身の回りを片付け出したのです。子ども時代から持ち続けてきたものを含め、あらゆるものに目を通し、点検をして、整理を始めたのです。あの時のようにモノを捨て去ったことは、その後もないでしょう。服も帽子も捨てました。本もおもちゃも捨てました。新しく踏み出さなくてはい

▲「遊ぶ子」　梶山俊夫

けないという声を背に受けたように、迷うことなく、がむしゃらに捨てたのです。こうすることの他に、父を失い、モラトリアムが終ったことを心と身体で確認する術がなかったかのように。ですから編集者時代は、父に守られ、そして勿論、先生方に守られた、何ものをも恐れなかった、ひたすら目を見開いてハッキリと見ようとしてやまない、まさしく「目時」そのものであったのです。

（十文字学園女子大学）

私と『幼児の教育』

池戸　允子

午前三時、街灯ひとつない真暗な武蔵野の雑木林の中を我が家に向かうタクシーの中で、身をこわばらせていた。『幼児の教育』の校正を終えて凸版印刷から清瀬まで帰る途中の思い出である。私はこの雑誌の一〇〇年という歴史の中のほんの一年数か月、昭和三

十一年（一九五六年）から三十二年にかけて編集にかかわらせて頂いた。

当時主幹は津守真先生であり、お茶の水女子大附属幼稚園で行われた編集会議には、同園長であった及川ふみ先生も出席されていた。私は大学を卒業し、専攻科で学んでいた頃からお手伝いをさせて頂いた。しかし、この頃のすべての資料や、私が関わった『幼児の教育』や記録、日記などは一九九一年十一月十五日、原因不明の火事により焼失した我が家とともに灰になった。今私は記憶を辿って思い出すままに書いて見ようと思う。

第一は蝋山政道氏の講演である。私はその講演を聴きテープ起こしをした。本旨はすべて忘れてしまったが、今も脳裏に焼き付いているのは「家庭の崩壊」という言葉である。家族関係を研究していた私はかつて経験のない戸惑いを覚えた。それとともに「家庭」を見る目が変わった。以来その言葉の意味は、私の中で広がり変貌して現在に至っている。

当時、お茶の水女子大学の学長であられた蝋山氏は、二十世紀から二十一世紀にかけて社会の崩壊が現実になり、様々な社会問題は、家庭の崩壊に起因することを見通しておられたのではないか。

第二は流行、特に社会や教育に関してである。それは「生涯教育」が来年はクロウズアップされると、編集の仕事をしているとき何気無く聞いた言葉である。若い世間知らずの私は、教育界も含めて様々な社会の流行は、意図的に作られていることを知りショックを

受けた。

この『幼児の教育』の編集にたずさわった時期こそ、私自身の人生の転換期であり、私は自らの人生の方向を決定すべく、心の中で大格闘をしていた時と重なる。

一九六七年六月九日の夜、私は人生の転機ともいうべき決断を自らに科した。それはキリスト教伝道者として救世軍に身を投じることであった。なぜ救世軍であったのか。それは父も母も救世軍士官であり、日本の救世軍の創立者といわれる山室軍平は、母の叔父である。

私は児童学科に学び、子どもと共に歩む人生に限ぎりない魅力を感じ、到底捨て去れないものがあった。その決定は神がしてくださった。児童学に関する魅力をそのままにその執着心から開放され、その日「神があなたを選んだ」という聖書の言葉に従った。キリスト者であられる津守先生は、「献身以外の理由だったら止めさせないけれど」といわれ私の決断を祝福してくださった。現在は、小さな単立教会の牧師として、この時代の荒波に翻弄されながら船底に安らかに眠りたもう主に信頼して船旅を楽しんでいる。そしてあの時の決断が間違いでなかったことに感謝している。

（敷島聖書福音教会牧師）

『幼児の教育』と私

桝田　正子

いつもいつも身近にあって当たり前のように感じていた『幼児の教育』が、百巻を迎えたということで、その地道な百年間の継続の重さに感嘆すると同時に、それぞれの時期に、強い思いと大変な努力をもって編集・刊行の作業を続けてこられた方々に感謝の念を抑えることができません。

＊

母が幼稚園の教師をしていて長年の読者であったので、表紙の絵と『幼児の教育』の誌名は、十代の頃から私にとって見覚えがあり親しみを感じるものでした。学生時代には、

当時附属幼稚園の中にあった津守先生の研究室で、編集の代表でいらした津守先生や実務を担当しておられた木原（赤池）さん、井上（寺井）さんのご様子を目にしていましたし、誌面には、実習や観察をさせていただいている附属幼稚園の保育の実際や研究会の記事なども載っていましたから、私自身としては何のお手伝いをしたわけでもなかったのですが、非常に身近な雑誌として思い入れも強くなっていきました。また内容的には、附属幼稚園の保育とは切り離すことのできない強い絆を持つものであり、その時々のわが国の幼児教育の様子を感じ取ることのできる雑誌という思いがありましたので、仕事を離れて家庭で子育てに専念していた数年間も、『幼児の教育』の読者であることによって、子どもと共にある者としての立場を考えることができたように思っています。

*

附属幼稚園の園長室の書棚には、創刊号の『婦人と子ども』から最新号の『幼児の教育』までがほぼ一年分ずつ製本されて並んでいます。いま書棚の前に立って、これらが附属幼稚園の、また日本の幼稚園の百年間と重なるものなのだと思うと、一瞬言葉では表現できないような感慨を覚えます。その重みを味わいながら改めて一冊ずつ読んでいくことが出来たら――それはものすごく興味のあることではありますが、現実に今の慌ただしい

日常の中では望むべくも無いこととも思っています。

しかし附属幼稚園には、時々各方面から古い時代の幼稚園や幼児の生活等について様々な問い合せが来ます。そのお返事をする際に、殆どの場合私は、参考資料の一部として関連すると思われる時代の『幼児の教育』を書棚から取り出して開いて見るのです。問い合せの事柄の背景に、当時の幼稚園ではどんなことが大切にされてどんな保育が行われていたのかを垣間見ることによって、関連して色々なことが理解されたり気付けたりするからです。全く別々の事柄として捉えていたことがつながりをもって見えてきたり、自分の中で金科玉条のように重視していたことのルーツを見つけるとそんなにこだわる必要の無いことがわかって思いがけない解放感を味わったり、時には異分野の著名人と思っていた方が幼児教育に深い関心を持っておられることをその記事から発見したり――全くプライベートながらこれまで読んだことも無かった母の投稿を見つけたり――、思わず時間を忘れて読みふけってしまうことも少なくはなく、現在附属幼稚園に在職するものとして『幼児の教育』の多大な恩恵に浴しているのです。

冒頭に書いたように、私にとって『幼児の教育』は、これまでも今も、いつも身近にあって、とても大切なものでした。これからも、そんなかかわりを持ち続けていかれたらと願っています。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

本年は創刊一〇〇巻の記念として一号より通常の記事の中に一〇〇巻にちなんだ記事を少しずつ掲載して参りました。この先も十二号までそのような形で続けていきたいと思います。一〇〇巻にちなんだ記事の中には、本誌の編集、発行に携わってきた方々の記事も入れたいと考えていました。長い歳月の間には、本誌を作るために尽力されてきた方々が数多くいらっしゃいます。これまでの経緯を知ることは、これから先の本誌を作っていくためにも大切なことであるとの判断から、今月号は主として編集サイドで本誌に携わってきた方々の記事を中心とした特集号とさせていただきました。

先代・先々代の発行人である津守真・本田和子両氏には、座談会にご参加いただき、当時のことを中心にお話を伺いました。座談会の中でもその名が登場する東基吉氏は、明治三四年に本誌が『婦人と子ども』として発刊された当時、編集一切を担当していました。その氏が、当時のことを振り返って書かれた記事（第五十巻第十一号）を再録してみました。本誌が『婦人と子ども』という名前でスタートしたいきさつなども書かれています。それとともに、発刊の辞と第一巻第一号の一頁も再録しました。発刊の辞に教育材料の重要性が謳われているとおり、一頁目は唱歌で始まっています。

発刊当時のこと、そして主に後半五十年間の本誌を作り手の側から振り返り、この先も一号一号を大切に作っていきたいと思います。これからも本誌をよろしくお願いいたします。

（田代和美）

幼児の教育

第一〇〇巻 第四号
（二〇〇一年四月号）

定価五五〇円（本体五二四円）

発行 平成十三年四月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会
〒112—8610 東京都文京区大塚二—一—一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

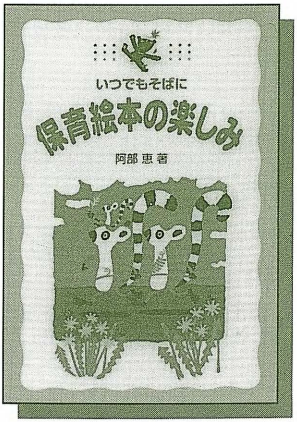
発売所 株式会社 フレーベル館
〒108—8620 東京都港区三田五—一一—一
〒113—8611 東京都文京区本駒込
六—一四—九
☎〇三—五三九五—六六一三（営業）
☎〇三—五三九五—六六〇四（編集）
振替 〇〇一九〇—二—一九六四〇

☆ 本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

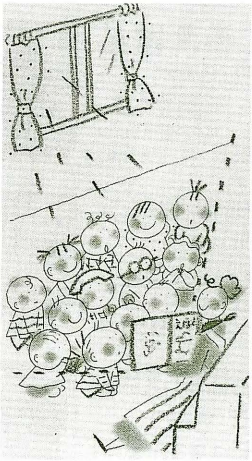
☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

保育絵本ほど身近にあって、
保育者の力強い味方になってくれる
ものはありません。
ところが「灯台もと暗し」。
近くにありすぎて、
その素晴らしさに気付かれないままに
なっていることが多いようです。
保育絵本を手にしたら
本書の内容を
ちょっとだけ意識してみてください。
保育の幅がぐんと広がります。

阿部　恵



保育絵本で子どもが育つ　保育絵本でいきいき保育



保育絵本は、子どもたちの興味と関心をよびさまし、想像力を刺激する内容がぎっしりつまっています。その保育絵本の使い方をさまざまな実例を紹介しながらわかりやすく、日々の保育に生かせる手引書となるように編集しました。

本文は6章で構成。
保育絵本の魅力と生かし方が満載です。

1章●いくつになっても懐かしい、絵本は人生の贈り物
2章●絵本は「読み聞かせ」より「語り伝え」
3章●もっと知ってほしい保育絵本
4章●保育絵本はなぜ大切か
5章●難しくない保育絵本の楽しみ方とコツ
6章●保育絵本がわかるQ＆A

いつでもそばに　保育絵本の楽しみ

阿部　恵・著

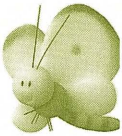
A5判／296頁／定価：本体1,300円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部
(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一〇〇巻　第四号　平成十三年四月一日（毎月一回一日発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

たくさんの夢と感動が生まれる保育絵本



絵本からたくさんのおどろきや話し合いが生まれるように編集しています。
幼児の発達や保育のねらいに合わせてお選びください。

総合生活絵本

季節、生活、お話、歌のページなど、月々の保育活動に合わせて構成されています。

キンダーブック①

定価３５０円（本体333円）

対象年齢　1②③45

豊かな情操を育む年少児向け総合生活絵本。

キンダーブック②

定価４００円（本体381円）

対象年齢　12③④5

感動する心や好奇心を引き出す年中・年少児向け総合生活絵本。

キンダーブック③

定価４１０円（本体390円）

対象年齢　123④⑤

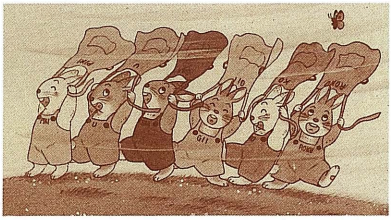
自然や社会観察を通して、実体験への活動を生む年長・年中児向け総合生活絵本。

がくしゅうおおぞら

定価４２０円（本体400円）

対象年齢　1234⑤

ことば、文字、数量などの基礎を学び、考える力がつく年長児向け総合学習絵本。



科学絵本

身近な自然を、リアルイラストレーションと迫力ある写真で深く掘り下げ、その驚異を感動的に伝えます。

しぜん－キンダーブック

定価４６０円（本体438円）

対象年齢　123④⑤

自然に親しみながら科学する心が育つ年長・年中児向け科学絵本。

お話絵本

幼児の気持ちをひきつけ、バラエティーに富んだ楽しいお話を毎月お届けします。

ころころえほん

定価３５０円（本体333円）

対象年齢　1②③45

遊びや楽しい会話が生まれる年少児向けスキンシップ絵本。

キンダーメルヘン

定価３５０円（本体333円）

対象年齢　12③④5

さまざまな絵本と出会える年中・年少児向けお話絵本。

キンダーおはなしえほん

定価３７０円（本体352円）

対象年齢　123④⑤

“おもいやり”をテーマに年長・年中児の心を育てるお話絵本。

おはなしえほんベストセレクション

定価３５０円（本体333円）

対象年齢　123④⑤

年長・年中児向けロングセラー“おはなしえほん”傑作集。

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

定価　五五〇円（本体五二四円）☆